家庭雜誌

第參拾參號

父母は敎師なり家庭は學校なり　子女を敎育するは父母の大任なり。

當今歐米の名女優　高尚なる働手は、働を高尙にす。

地震　此の恐ろしき現象は、如何にして起るや。

痴兒ハンス　ハンスを例として、一種の痴兒を說明せしめよ。

捨小舟　彼女が磯泂に留めたりし可愛ゆき足跡は時代の波に洗はれて痕なけれども、彼女が朝々の思は盡きず。

十二文豪 第六巻 **エマルソン**

定價拾八錢 郵税四錢

以後出版の書目人名左の如し

『頼山陽』……德富猪一郎　『トルストイ』……德富健次郎

『瀧澤馬琴』……塚越芳太郎　『近松巣林子』……塚越芳太郎

『新井白石』……山路彌吉　『ユーゴー』……人見一太郎

毎月出版 **平民叢書**

毎月一回發兌 十冊完結 紙數百五十頁

平民叢書第一巻 **十九世紀之大勢**

定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第二巻 **世界經濟上之變動**

定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第三巻 **國家と政府**

定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第四巻 **教育と遺傳**

定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第五巻 **文明之弊及其救治**

定價拾貳錢 郵税貳錢

第一國民小說　定價拾五錢　郵稅四錢

第二國民小說　定價拾五錢　郵稅六錢

第三國民小說　定價拾五錢　郵稅四錢

第四國民小說　定價拾五錢　郵稅四錢

湖處子宮崎八百吉著
歸省　定價拾五錢　郵稅四錢

乾坤一布衣著
最暗黑之東京　定價拾三錢　郵稅四錢

ヴヰクトル、ユーゴー著　森田思軒譯
懷舊　定價貳拾錢　郵稅四錢

德富猪一郎著
吉田松陰（肖像入）　定價五拾錢　郵稅八錢

德富健次郎纂譯
グラッドストン（肖像入）　定價貳拾錢　郵稅四錢

德富健次郎纂譯
武雷士（ブライト）（肖像入）　定價拾五錢　郵稅四錢

德富健次郎纂譯
格武電（コブデン）（肖像入）　定價貳拾錢　郵稅四錢

◎近く出版成るべき消夏第一の書

德富猪一郎著

國民叢書第六冊

天然と人

本月中旬出版

定價拾五錢　郵稅四錢

本書題して「天然と人」と云ふ、是れ民友子が總ての人事と天然とに關する雜記隨筆類を輯錄したるものにして、旅行記あり(譬へば阿蘇の煙、東海道中記の如き)、通信文あり(譬へば熱海だより、逗子だよりの如き)、書簡文あり(譬へば總撰擧夢の跡の如き)あり、其の他あり。而して是皆な不用意の文字に得、而かも亦赤心の觀察に出で、同情の眞念に發したるものなれば、其天眞流露して、恰も空山に水流れ花開くるが如く、神味の悠然たるものあると同時に其觀察精到深至、能く事物の眞を穿ち人情の根底に達し、人をして肉飛び眉躍るの感あらしむ。故に風景を寫しては、乍ち几邊に山聳へ川流れ、風土を叙しては、眼前突として乍ち農家、漁村、野翁、村孃、桑麻、稻田、春祝、秋祭の狀を見、人情、風俗、生活、其現在、其未來、其過去、或は有形、或は無形、物として具らざるはなく、事として悉さゞるは無きを見る、其他古跡を尋ねては、則ち歴史の因緣に遡り、校舍を音づれては、則ち見童の性情を稽へ、或は人物論となり、或は名[illegible]となり、故鄕となり、朋友となり、詩歌となり、逸事となり、趣味滿溢、一々指陳すべからず。若夫れ一大變化百端、活劇たる帝國議會の光景(特別なる)を描すの手腕に至ては、吾人の呶々を要せず、思軒居士の言之を證して餘あり曰く、「見て國民の解散の光景に至て覺へず目爛肉動くユーゴー隨見錄の議會の事を記するも亦た之より加ふる能はず云々」然らば知るべきのみ、此書を讀むは、それ猶ほ江山清風の邊に臥しながら、耳に社會の逸聞を聽き、目に天下の活劇を見るが如くならんのみ、世豈に斯の如き快事あらんや、世豈に斯の如き消夏法あらんや、若し之を得んと欲する人は只此書を讀んで得よ、只此書を讀むで得よ。

十二文豪號外

内田不知庵著

ジヨンソン

肖像入　本月中旬出版

定價十八錢　郵稅四錢

日本今日の文明は、十九世紀の形を有すれども、其實十八世紀を繰り返へしつゝある也。殊に今の我文學社會は、十八世紀の英國文學に類似せる跡多し。故に今日の價値を知らんと欲せば、先づ十八世紀の英國文學を知らざる可からず。十八世紀の英國文學を知らんと欲する者は、十八世紀英國文學の巨人たる「ジヨンソン」を知らざる可からず。十八世紀の英國文學を振興せし者は、渠れ「ジヨンソ

家庭叢書第一卷

家庭の和樂

定價拾錢郵稅二錢

本書に對し已に發表せられたる天下の公評は左の如し

民友記者我邦家庭の爲めに努むると漸し先には家庭雜誌を發行し今亦た家庭叢書なるものを出版す此書は其の第一卷たり記事引例共に簡易にして婦人小兒にも解し易からしむ、努めて懈らずんば其の家庭の品格を高くし平和を增し且つ康樂と祝福とを來すこと必らず少なからざらん　（報知新聞）

是れ專ら平民主義の風儀を家庭の奥までも實施演行せんとする民友社一流家庭叢書の一として新たに版行せられたる袖珍平易の冊子にして家庭の和樂を望む女派の人々先つ一讀して可なり　（二六新聞）

此書は我邦家庭の品格を高うし家庭の平和を增加し家庭の康樂と祝福とを多く來さんが爲めに世に介せられたるなり左れば是れより健全なる而も和樂に滿されたる家庭を形ち作らんとする者は勿論無味蠟を嚼むが如き反目敵味方の如き猜忌異宗の如き一口に云へば敵同士の集りの如き家庭は此を讀んで其の弊竇を洗滌すべし傍訓つきなれば婦人先づ第一に讀んで次でうちの人にも讀んで貰ふべし。。。　（大坂毎日）

民友社より新に發行する「家庭叢書」の第一卷にして彼の「平民叢書」と形を同うせる小冊子なり、例の平易なる文章をもて健全なる家庭を作るの法を說く所、民友社の獨得也、思ふに平民の友といふ平生の主義に背かず孜々として社會改善の方法を講ずるの誠意及び其の手段の宜しきを得たるは、方今民友社を第一とすべし、此の書に說く所もとよりコンモンセンスたるに外ならねど其のコンモンセンスたる所すなはち其の健全なる所なり、吾人は此のフランクリン的教誨の彌々深切ならんことを希望す　（早稻田文學）

例の平民的口調を以て平易に綴れる小冊子なり家庭道德頽廢せる今日に在りては聊か改與の一助たらんか　（國會）

家庭叢書の第一卷として、發兌せられたる一小冊なり。『家庭の品を高くし、家庭の平和を增加し、家庭の康樂と祝福とを多く來さんが爲めに候』と德富猪一郞氏が緒言に在るが如く、實に我國の家庭に切要なる新著なり。書中記する所、驕奢を誡め、節儉と力行とを勸むること、最も周到にして、家々の内君を益すること大なるべし。借金を積みつゝ外見を飾るは、一般の風ともいふべき有樣なる今日、かゝる書を繙きては、我ながら此炎天に腋の下より冷汗を漲さゞる内君家宰は幾人かあるべき。唯恨むらくは此書も例の民友社流の筆法なれば、僅に高等小學校の卒業位の家庭の婦女子には解す能はざるべきを。　（少年園）

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　**民友社**

竹越與三郎著

新日本史

上卷（七版）定價四十錢 郵稅六錢
中卷（三版）定價三十錢 郵稅六錢

是れ曾て文學界を震蕩せる著作也。曰く『最も進歩せる史躰〱詩人の筆ある歴史〱愛蘭土黨の首領マッカーテーの大英史に彷彿す』『史學社會の妖魔』『黨派的臭味〱眼光極めて公平〱歴史に一大改良を施さんとするの企〱華麗雄渾、マコウレーの如く山陽の如し〱當代無二の好著』『新日本のパノラマ〱マコウレー論文を讀むの心地す〱ウヱルベル的叙事とマコウレー的評説を兼ね備へたるもの』『維新後の文明史』『斷定は頗る大膽、毅然明白〱哲學的眼光〱活きたる歴史〱近世史中の巨擘〱千言萬語、雲の湧くが如く潮の漲るが如し』『一流麗逸宕、精致、透徹〱俗論卑説を喝破して嶄然、一機軸を出す』是此書に與へられたる批評の一斑也。一人あり新日本史を取つて、之を米國の人、グリッフヰス氏に送る。氏は維新の交、松平春嶽侯に聘せられて、兵制改革に盡力せるものにして、今や老をボストン晩霞に餐ふ。其我國に對する同情切深、日夕東方の時事に注目す。此頃遙かに著者に書を寄せて曰く、數ば日本近世史を見たり、然れども一も滿足する所なし。貴下の新日本史を讀みて初めて滿足し坐ろに維新當年の事を思ふ而して恰かも愛蘭黨の首領ジヤスチンマッカルテーの近代英國史を讀むの心地す』以て其如何に此書が人に快感を與ふるかを見るべし

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

德富健次郎纂評

再版

近世歐米歴史之片影

定價 二十錢 郵稅 四錢

夏日の快樂は愉快なる讀書に若くはなし本書近世歐米歴史之片影は泰西大文學者の傳あり大政治家の生涯あり一擲千金の大投機師の生涯あり面白き將來世界の推測あり大市名都の記事あり大國會の大討論あり皆趣味津々たる文字を以て尤も愉快に叙し盡し就中軍事上の記事に到ては近世第一の大戰爭たる普佛戰爭は此舞臺に立廻りたる維廉老帝、ビスマアク、モルトケ將軍、奈破烈翁三世の大活劇を初めとし露國近世の名將飛將軍スコベレッフの一生及露土戰爭の大活劇並に戰場に花を咲かせし米國南北戰爭の少年軍等渾て雄麗壯快風雨の如く錦團花簇の如き文字を以て叙し去り叙し來り萬馬紙上に躍り風行間に湧くの勢あり一讀雨驟颯として風起り亦三伏の暑熱を知らざらんとす今や韓山の風雲正に濃やかに兵動き艦駛るの時讀者諸君若し燈を挑げて此等の篇を讀まば慨然腕を扼して西の方雨霽の天を望み「慷慨長歌看寶刀」ものあらむ

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

社告

家庭雜誌は凡て前金に非されば發送せず、見本は郵劵五錢五厘にて呈す、郵便爲替の拂渡局は芝口支局、本誌代價の郵劵代用は爲替局の無き地に限り可成五厘切手にて一割增

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵稅共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰)一回ニ付金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 垣田純朗
編輯人 塚越芳太郎
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社
本社 電話番號七十番

明治二十七年七月十日發行
家庭雜誌第參拾參號

目錄



家庭雜誌第參拾參號

（明治二十七年七月十日發兌）

社說

父母は教師なり家庭は學校なり

子女を教育するは、父母の大任なり。萬事は差し置きても、先つ務む可きは、子女の教育なり。教育とは、書を讀み、字を習ひ、算數を識るの謂にあらず。その心を淸ふし、その身を修め、その人品を高ふし、其の常識を養ひ、立派なる人間となす事なり。

兎角學校にさへ入れは、教育は出來るものと思ひ、教師にさへ依托すれは、教育は完全なるものと思ひ、無頓着に打過くるものあり。是れ實に大なる了見違ひと云ふ可し。

學校の教育は、詮し來れは教育の皮相のみ。若し教育の全部を十とすれは、學校にてなし得可き教育は、その二三に過ぎず。その二三に過きすして、他を放擲す。その子女の教育の不行屆きなるも、亦宜へならすや。』世の父母たるもの、動もすれはその子女の家にありて五月蠅き爲めに、或は幼稚園に、或は小學校に、更らに或は中學校、若しくは高等女學校に追放するものあり。是れ名は教育と云ふも、その實は追放なり。斯くして無頓着に子女を學校に放任す、その教育の不充分なる、亦宜へならすや。或は子女教育の面倒の爲めに、學校に追放し。或は學校を以て萬能力ありと認め、一切之に依托して、自から頓着せす。二者その心は相違あれとも、その結果は則ち一のみ。

特に此の流弊は、女子教育に於て、最もその甚しきを見る。彼の女學校生徒の卒業したるものを見すや、その二三の例外は、暫らく措き、如何に彼女等か一家に

於ける迷惑者なるよ、厄介物なるよ。彼女等は一通り讀書も出來、曲りながらも手紙も書くとが出來、新聞を讀むとが出來、或は英語にて天氣の挨拶位は出來るなり。此の點よりすれば、餘程調法なるが如しと雖とも。彼女等は實際的の修練乏しくして、切に云へば六疊敷の部屋をすら、思ふ樣に支配すると出來ぬなり。手近く云へば彼女等は字を知る野蠻人のみ。何となれば彼女等は自から治め、且人を治むる能はざれば也。』

彼の最愛の女子をは、五年乃至七年、學校に一任し、偶ま家に歸れば、その父母たるもの之を珍客の待遇をなし、唯たその御機嫌を損せざらんとをのみ是れ務むるもの、その結果は如何にある可き。彼女等か偶まその苦學を終りて、學校の門を出てたる後は、氣高く、不經濟にして、不調法なる、我儘にして、不精細なる一の厄介女を產出するものと氣附かすや。

是れ決してその子女の罪のみならず、父母たるもの、子女の敎育を學校に放任したる自業自得の因果と云はさる可らす。

されば世の父母たるものは、子女敎育の大躰は、家に於てその父母たるもの自から擔當す可きを識り。而して學校なるものは、畢竟その足らさる所を補ふに止るを識り。家の敎育は主にして、學校の敎育は客なるを識り。而して敎育とは讀書、學藝等に限らず、總て人間として身を修め、家を治め、人に接し、社會に對すると皆な敎育なるとを識り。よろしくその天職を盡す樣にあり度きものそかし。

或る父母は、自から文明流の學問を知らぬが故に、とても子女の敎育をなす能はすと云ふものあれども、此れは大なる誤りなり。何となれば彼等は學問こそ或は乏しけれ、實際上の經驗に於ては、その子女を敎育するに於て、餘りある程之れあるにあらずや。一字を識らぬ母親にても、その家を治むるの道は、外國語に通

する女學校卒業生よりも、餘程長じ居るを知らば、左樣なる心配は無用にあらずや。

特に女子敎育に於ては、成る可くは學校に寄宿せしめず、我家より通學するの方法を採りたきものなり。如何なる手の屆きたる學校も、寧ろ手の屆かざる家庭程には及ばぬものなり。それ女子の敎育は、敎場よりも寧ろ坐敷、部屋、臺所の裡にあり。敎師の言葉よりも寧ろ母親の言葉の裡にあり。故に若し家よりして通學の便なくんば、成る可く健全にして堅實なる家庭に寄寓して、それより通學する方然る可し。學校に寄宿せしむるは、萬ん餘儀なき後と知る可し。

呉々にも子女敎育の大任に當るものは、學校敎師よりも、寧ろその父母にあり。學校よりも、寧ろ家庭にあり。世の父母たるもの、よろしく主客の別を明らかにし、その大任を盡すの覺悟ある可き也。

史談

當今歐米の各名優（上）

一、エルレンテルリー女史

英國の演劇と云へば、直ちに之と共に想起せらるゝは、エルレンテルリー女史の事なり。當時英國の團十郎とも云つ可くヘンリーア、ヴィング氏と共に、倫敦「リセアム」劇場に絶妙の技をふるひ、英國演劇界の女王と仰がるゝテルリー女史の事なり。

女史は八歲の年初めて舞臺に上れり。其後或は姉と共に低き役を勤め、或は父に連れられて田舍を興行し廻はり、或は演劇を棄つる十年に及べることもありしが、今や四十七歲の齡を重ねて、伎熟し腕冴へ、天晴英國一の名女優となりぬ。女史は早くより名なきにあらざりき。然も其大に名を揚げたるは、千八百七十八

年ヘンリーア、ヴィング氏と共に「リセアム」劇場に出でたる時にあり。爾來こゝに十六年、兩人の名は日月の如く英國の演劇界を照らし、單に英の二嶋を征服せるのみならず、未だ相伴ふて合衆國加拿陀遠征の途に上り、到る所向ふに前なきに到れり。



エルレンテルリー女史

若し容貌の美、音聲の美、勢力活氣の點より云へば、女史に駕して上るの女優固に少なからざるも、其の眞にやさしく女らしく、また動作優美に顏色靈活に、言葉の率直眞實にして、言ひ難き風姿風情を有するに到ては、女史は不可奪の位置を占めたり。女史は稀なる同情の力を有し、何人に接し、何の役を勤むるも、直ちに自己を沒了して感情思想すべて別人の如くなれり。故に其の舞臺にあるや、何人も女史か扮する所の其人あるを知つて、女史あるを知らず。其の得意として好んで演する、ビアトリス、ポルシア、オフエリア、オリヴィア、マルカレツト、ヘンリーエツタマリアの諸役の如き、近世無比と稱せらるゝも亦故なきにあらず。

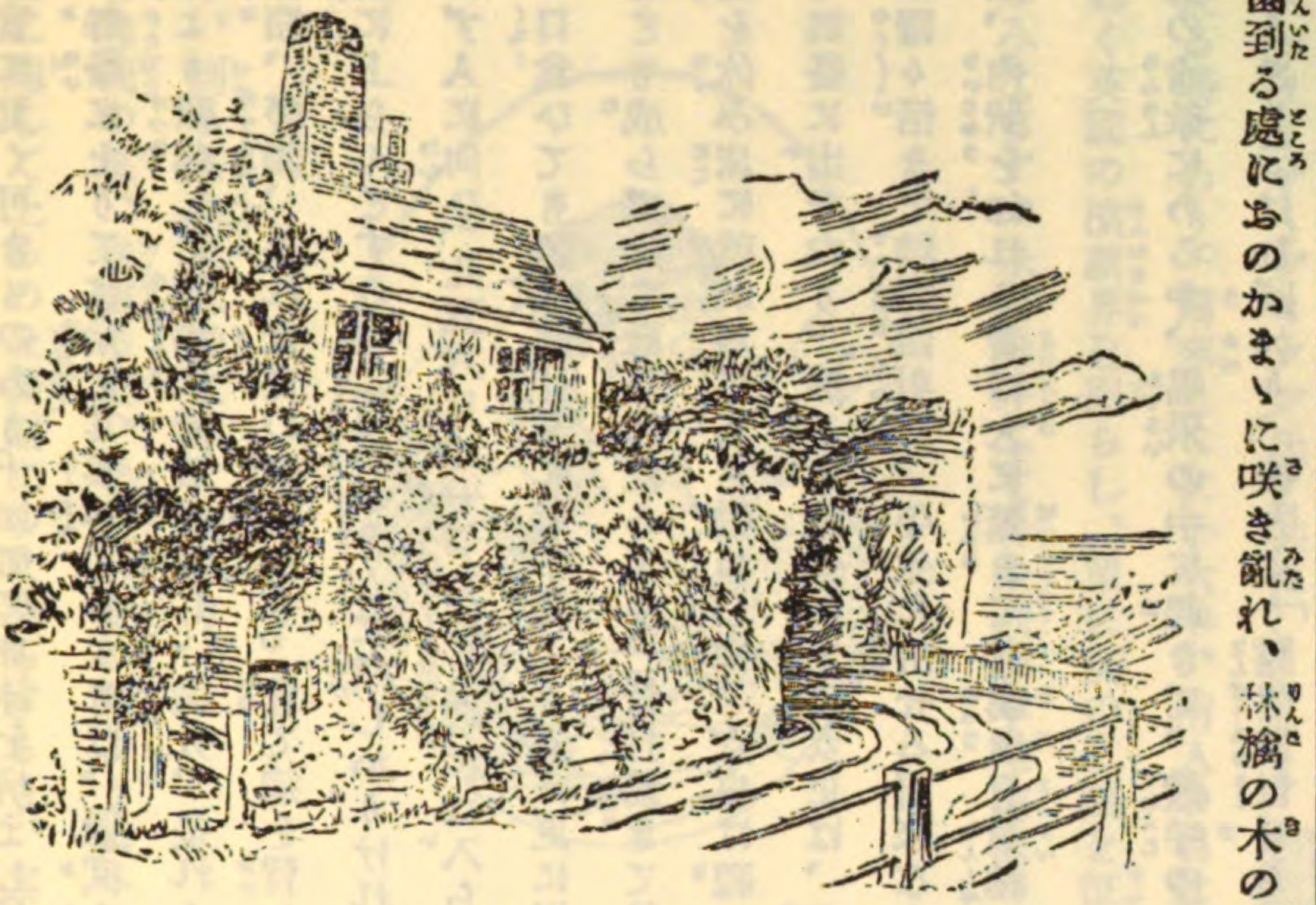
美術家程嫉妬の心深き者はあらず。婦人にしては、更に然りとす。獨りエルレンテルリー女史の如きは、能く此通弊を脫し、其の佛國の名女優サアラアベルンハアドに敬服し、同業仲間の成功を喜ひ、ア、ヴィング氏の成功を喜び、半點娟嫉の念なきは、女史の品格を尋常俳優の上に高く維持する所以なり。

テルリー女史は病氣勝の身なるも、其勇氣盛に意思强き、實に驚く可きものあり。如何に身躰を病まし居るも、舞臺に上りては殆ど其痕跡すらなきは、猶武士の病床より蹶起して戰塲に走るが如し。職分、是れ女史の標語、勞働、是れ女史の金規なり。曾て病を冒して舞臺に上らんとする時、苦痛あまりに烈しかりければ、思はず人に向ひ「此五六日は一切食物も咽には入らず、一ト口食ひても苦痛は非常にて牛乳より外は更に用ふることも成らず」と歎息したるより、皆打驚きて是非共業を休み床に就かる可しと勸めしに、女史は聽かずして舞臺に出でたり。然るに舞臺の上の女史は、言語動作躍々活きて精彩四射し、平生に倍せる出來なりければ、內狀を知れる者は大に驚きて其勇氣を歎稱せりと。

女史の倫敦にあるや、喝采の中に起きて、歡呼の中に寢ぬるとも云はむばかり、四方より膽望注目せらるゝ名譽顯榮の位置にあれ共、成功は女史の眼を暗まさず、喝采は女史の耳を迷はさず、女史は寧ろ騷々しき名譽の都を愛せずして、靜かなる田舍の生活を好めり。是れ蓋し成功に饜ける有名者の思はせぶりにあらずして、女史の眞に閑居の人なるによれり。故に美術家としてのエルレンテルリー女史は、「リセアム」劇塲電燈晝よりも明らかなる所に見る可きも、婦人としてのテルリー女史は、倫敦の其家に於て、寧ろ倫敦を距る遠きサッセックスの其閑居に於て之を見る可し。女史は二三日の閑を得る每に、即ち此の閑居に向つて逃れ行くなり。

倫敦を距る遠く、サスセックスのウインゲエルシアなる風景の地、一方には平野漠々として遠く海に下り、一方には村落を撒き散らせる田舍の景色次第に丘の方に上り、蔦、葛、常春藤、薔薇の堆く這へる間より瀟洒たる家の窓は覗かれ、薔薇百合さま〴〵の花は庭除

後園到る處におのがまゝに咲き亂れ、林檎の木の蔭に



釣網張られ、厩に駒あり、門に人少なき、是れ英國一の名女優エルレンテルリー女史が時々騷がしき成功の間より逃れ來つて靜閑を樂む所なり。此處には演劇の事夢にも入らず、女史は親しき家族朋友等と、日又日靜かに穩やかなる日を送る。都會にありてさへ、女史は演劇終るの後夜會に行くを好まざる程なれば、田舍にありては閑中の閑生涯を送れり。午前には讀書勉强、午後には或は苑中に安樂椅子に凭りて白日夢に入り、或は散歩し、或は乘車し、また貧困疾病の者を訪ふ、是れ女史が閑中一日の生涯なり。

女史はウインチエルシアに於て夥しく人望あり、是れ其の慈善の竭くる所なく遍ねきによれり。慈善家程欺かれ易き者はあらず、女史も亦多く欺かれたり。曾て貧困なる一婦人の書を寄する者あり、云ふ、近々の中出產迫れり、金なく衣なし、扶助を請ふ」と。女史直ちに其の名宛の所に金錢フランチル等を届けしめ、斯くて此事は忘れ居たり。數日にしてまた手紙來りて云ふ、

生れたるは双生子にて一ト方ならず困難し居れば更に扶助あらむことをと。テルリー女史即ち其知る人に金錢スープ菓子毛布等を持たして名宛の所に遣はしたるに、何ぞ圖らん、彼方には母もなし子もなく唯物乞手紙を書きて渡世する老人二名を見出さむとは。然も女史の慈善之が爲めに止まざりき。

女史また常に村の小兒を集めて茶を饗應し、小供等をして其課業に學べる所を暗誦せしめ、自らも朗誦し聞かして樂めり。女史は村の慈善事業、敎育の事業の中心にして、さま〴〵の事に付き女史の助言を求めに來る者多く、女史が訪はざるの病者なく、往々にして其の數多の婦人を集め己れ中央に坐して慈善用の衣裳を縫ふのさまを人に覗はれ、是ぞ果して世界に名ある女優贅澤を爲し盡しても足らざる女優なるかと驚かれしとも少なからず。女史また曾て三輪自轉車に熱中し此頃は又素人寫眞に熱中し、閑あれば即ち之を弄べり。』

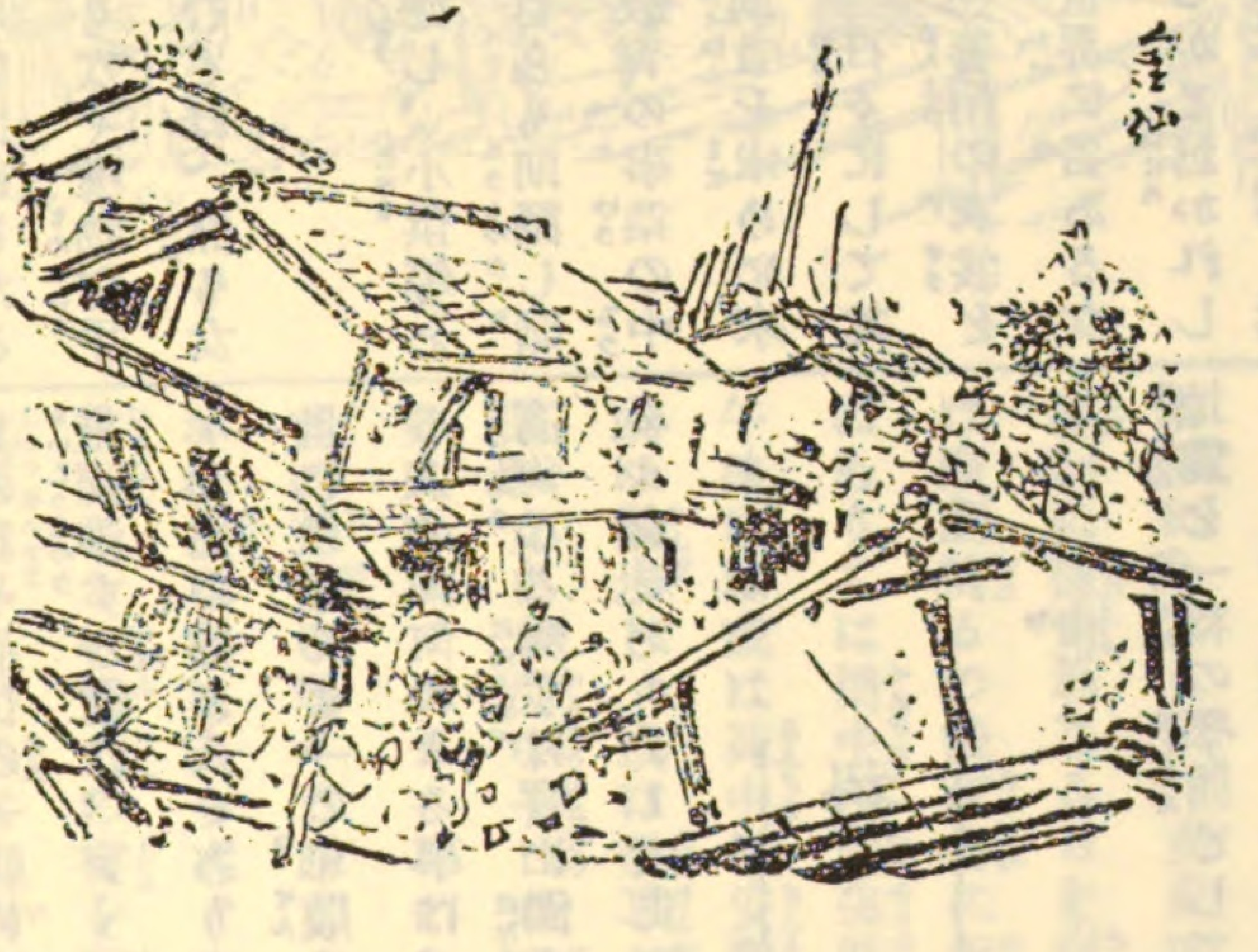
畢竟するに渾の事、人物之が原たらざるなし。英國の如きも、俳優社會は甚麼の男女なきにあらざるも、其の調子品位の一躰に高ふして、何人も好むで之と往來交渉する者は、アーヴング氏の如くエルレンテルリー女史の如き人々ありて其調子を維持するに因れり。世には殆んど一の卑賤と云ふ可き業なし、唯其業を執る人の如何による事は、今更言ふ迄もなき事なれども、高尚なる働手は實に働きを高尚ならしむるの實例は、エルレンテルリー女史の事に於てまた之を見る可し。

科學

地震

地震を一科の學問として研究するに至りしは、僅かに三十年此の方のとなれば、甲の學者は彼を云ひ、乙の學者は此を云ひ、昨日の說と、今日の說は異なりて、

未だ幼稚なると、他の科學より數十歩下に位ひせり。然れば震動を試驗せんが爲めに、備なへられたる器械は、震動のために常に打ち破わされて、肝要なる時に至りて計ることを得ず。地中の鳴響を聞くに備へたる器械は、晝夜目を張りつめ、耳をすまして、一眠なくして聞くに非ざれば功なく、其の不便不充分は感じなから未だ之を改たむるの術を知らざるなり。我國近來頻りに地震あり、盤梯山の破裂より、引き續きて美濃の大地震あり、殊に過る日東京の地震ありてより、人心大に驚怖し、地震何物か、地震は如何にして逃れ得べきやと云ふ問題は至る所に喧びすしくなりぬ。いざや茲に少しく地震の性質を研究せん。



科學の中にても、地震は極めて廣き關係を有し、最も面白き現象を顯はせり。地質學者が、地震の事に心を傾むくれば、未だ見し事もなき岩層を發見し得べく、理學者が之れを研究する時は、岩石の彈性に關する夥多の發明を爲し得べく、氣象學者のためには、地震と氣壓、温度の變化、雨量の多少等に係はる緊要の問題あり、特に建築學者、天文學者、數學者、博物學者のためには、幾許の大切なる關係を有するか計るべからざ

るものあり。かく地震は諸學科に關係あり、且つ人心に及ぼす影響の小ならざるを知れば、今日地震と云ふ問題につきて、説明研究するヿは、豈に必要なるにあらずや。

地震の原因は何ぞや

地震の原因の重もなるものは、地中の熱の作用によりて、地皮の膨脹し、或は收縮するものと、溫度に變化あるヿと、氣壓風雨に異變あるヿと、大陽と月との引力と、地脉地動等の變化とにありと雖も、大低の地震は、一つの原因のみにては起らずして、二つも三つも原因の重さなるを通常とす。故に地震を研究せんと欲する人は、先づ凡ての學科に、豫かじめ通ぜざるべからざるなり。

第一の地熱に關して起る地震の作用中にても、最も恐ろしくして身を震るはしむるものは土地の陷落と、裂け目なり、現に先年、美濃の大震の如きはその一例なり。岐阜縣、大野郡、根尾村を通行せる人々は、直徑一里餘深さ二十丈餘の地獄の如き大穴を見しならん。これその當時、轟々たる雷聲を發して、陷ちいりし穴にして、幾多の人民幾多の家、幾多の動物は、生きながら埋葬せられし紀念碑なり。もし我等がその穴に臨み見る時は、遙かの彼處に、寺の屋根の如きものを見るを得べし。その地の陷ち入るためには、日本全國の、殆ど六分方、即ち一萬五千七百五十方里の間は、大と小との差こそあれ、地震の餘響を蒙むりたりき。即ち南西は中國、四國、九州より、東北は陸羽地方に亘りたりき。岐阜縣下の家屋のみにても、四萬五千餘を潰ぶし人の死傷せると一萬數百人なりき。

我が國にては、殊に此の種の地震多く、白鳳十三年の大地震には、土佐の陸地海底に沈づみて、昨日の町は、今日の海中の龍宮と化したり、明應三年には、遠江濱名の陸地陷りて、海と湖水と續きたりき。其他天明の

地震と云ひ、安政の地震と云ひ、何れも所々に廣ろき地裂を生じたり。地裂は多く山の斷り岸、或は川、湖、堀等の邊に生ず。これは盆の上に砂を盛りてゆさぶる時、最初に先づ兩端のくづるゝが如く、地震の初まりて、波動の來る時、山岸や、川や湖の邊は、支ゆるものなきが故に、水中に投げ込まるゝため、裂け目を生ずるなり。

次ぎは、地中の水蒸氣と、地中の沸騰水が、出で所を求むるために、發する地震なり。古しへは、地中の蒸氣と云へば、たゞ地心の水液が、地熱の爲に沸騰する事のみを論ぜしが、近來は、之れに一説加はりて、水蒸氣は、地球の表面の水が、地皮の裂け目などより流れ流れて、地中に侵入する中途、火山脈に觸るゝより生ずるものなりと云へり。我が國にて、その證據を擧げんに、我國東北地方の震動の九割は、常に海中より生ずるを以て、水壓によりて水が土中に侵入せし證據の一とす。二は爆裂性の震動を生ずるを以て知るを得べし。盤梯山の破裂は爆裂性なりき、全山の破裂せんとするや、非常なる響を發して、岩石土塊の溶けたるもの、泉の如く、川の如く、流れ出でたるがために、人畜の燒け死にしもの、無數なりき。

次ぎは、火山より生ずる地震なり。今ま若し、一尺の重箱に充滿せる土ありとせんに、その中に高かさ三寸の山を作らんと欲するには、重箱の中の、何れよりか三寸の土を取り來らざるべからず。地球は大なる重箱なり、その重箱の上に、幾個ともなき山の生ぜるに、幸ひにして、或る山の土は、或る湖水より取り來りしものもあらん、されども或るものは、その山の下に、空なる洞を生じて、出來しものもあり、あるは、他の所より土を奪ひしもあらん、その大なる洞のある地球が、間斷なく回轉し、間斷なく地中の熱の變動を受くる時は、洞の周圍は、崩れざらんと欲するも得べから

ず。その崩るゝためには、或は土地の大陷落も生ぜん、或は大裂目も生ぜん、かくて地震は生ずるなり。特とに、所々の泉より流れ出づる、固形物の分量は、實に果多なるものにして、礦泉より、一年間に流出する礦物を、積み置かば、非常に大なる丘陵を築き得べし、と云へり。

以上は地中の關係のみを説きしが、外部よりも亦た大なる原因を作るものあり。即ち、日と月との引力によりて、洋海に潮の出たるが如く、同じく日月の引力によりて、地心の液躰を引き付けて、地中に潮を生ずるにあり。その引かれたる液躰は、若し地上に出づる穴もあれば、逃れ出でんと競ひ求むる中に、幸ひ裂け目等のある時は、その處より流出するために、近邊の地を震はしむ。

次ぎは、潮のために地震を生ずるとあり。水一升よりは水二升の方重み強よし、故に一升の重みにては、破ぶれざる地皮も、三升となりし時は、その重みのために破ぶるゝとあり。殊に一升の水にて破れざる程の小さき穴も、二升となりては持ち堪えずして破ぶるゝとあり、これ地震の原因の一なり。

次ぎに記さんとする氣壓の變化も、亦た同じ理なり。氣壓俄はかに加わゝりて、水上を壓せる後、又た俄はかに變して、氣壓無くなるとあり。然る時は、今迄、水に壓されて、之れに抵抗せし瓦斯が、その勢ひに乘じて、地皮を内よりつき上ぐるが故に、忽ち破裂を生じて、地震を生ずべし。その證據には、氣壓最も多く、氣壓の變化最も多き冬中は、平均して夏よりも、地震多きを以て知るを得べし。

其他强風のために大なる壓力を生じ、雨のため水の土中に浸潤し、温度の變化のために、氣壓に關係ありて、地震を生ずる等、一々に記せんは小冊子の及ぶ所にあらざるなり。

地震によりて流がれ出づる物

親たしく美濃尾張の震災、或は盤梯山の破裂を目擊し給へし人々は、實地に流出せし物を見給へしならん、現に余が知りたる一人は、當時岐阜にありしが、その時地中より流れ出でたりと云ふ、美つくしき水晶の如き砂と、青き硫黄の如き土との、流れ出でしものを、貯へ居れり。盤梯山の死傷は、多くは土石の燒けて流れ出でしに由れり。其の後多量の水の噴出づるとあり。ジャマイカ地震の時面白き一話あり。その時地震にて逃げつゝありたる一人の足元突然裂けて大穴を生ぜしため、その人は急ぐはづみに、どかりと底も知れざる地獄に落ちたり、もはや斷念して目を閉ぢ、過去を思ひ起し、妻子を思ひ案じて、今や〳〵と地の閉ぢて死の來るとを待ち居りしに、果せるかな大なる響は來れり、ドーと鳴りて近づくと聞く時、ドンと一聲鐵砲の如き聲と共に、身は地上數十尺の上迄吹き上げられ、再たび此の世の者となれりと。之れ水の噴出につれて吹き上げられしものなりき。其仝時の事なりき、硫黄氣の蒸發せしため、無數の海魚と、地上の鼠の夥しく死し、且其臭氣のため、三千人の命を落したりき。

殊とに地震のために、泉水、河川等の、變ずるとは少なからず、過る日の東京の地震にも、或は井の水は涸れし處あり、或は濁りし處ありしが、西暦千八百四十八年アルデビルの温泉の如きは、地震のために温度俄かに上りて、中に居りし人をして火傷せしめ、リスボンの地震の時は、ボヘミヤの温泉は冷水となり、泥水と變じ、流出止まり、次ぎは非常の勢力を以て赤泥を出だし、竟に元に復せりと云ふ。これ井若しくは泉の存在せる土地が、地震の爲めに變動を起するに由るものなり。其他大洋の水動搖して、津浪を生じ、大河の中に土の落りて水をせき止め、新らたに他の河を生ずる等は、已に人々の知る處なり。

動物によりて地震を知る

地震が甚だしき慘狀を與へし以來、いかにもして地震を預知するの法を考へ、人をも助け、己れをも救はんと欲するは、人々の願ひにして、學者も之れが爲に、幾多の腦味噌をねりたりと雖も、未だ是れぞ明法と云ふものに出で遇はざるは、地震に付きての智識の足らざる故なり。されども二三の現象を合せて觀察せば、多少之れを預知するを得べきなり。即ち最も手近かきは動物によりて之を知るべきなり。我國にても昔しへより雉子の鳴くは地震の前兆なりと云ひ、犬猫の眠らざるは地震の徵しなりと云ひ、又た現に岐阜地震の時は、或る家の猫類に逃れ出でんとせしを以て、戶を開きしに、程無く地震起り、その戶口より逃ぐるを得たりと。これ地震の前に氣壓の起りしも、人躰の感する程強くあらざるに、小さき動物は之れを感ずるに由るものなり。其他泉中の色、溫度、味等に變化を生ずるは地震の前兆と定めて大過なかるべく、地中の鳴動、大氣の摸樣に異變ある等、大低地震の前兆として過たざるなり。されど悲しむべきは、未だ之れを確報すべき器械のなきとなり。或る人は、地鳴を聞くべき器械を置きて、地震を前に知らんとせり。されども、地鳴は地震のなき時にもあるとあり。或る人は、磁石力に變動を來すを以て、之れを前知せんとせり。然れども、磁力は地震のためにこそ變ずれども、磁力のために、地震は生ぜざるを以て。何れも成功を顯はさざりき。

文藝

痴兒ハンス

湖處子

痴兒とは何ぞ、乞ふハンスの例をして一種の痴兒を說明せしめよ。

ハンスが七年の奉公終りし時、渠は主人に暇を乞ひ、是より故郷に還りて、母に見えんことを申し出てければ、主人も實もと、渠を呼ひ、汝は善き僕なりしゆゑ、また善き報酬を得る權利ありと、七年間奉公の給金として、一個大なる金塊を與へ、渠を許して母の家に還しぬ。

ハンスは鼻ふきを取り出し、金塊をつゝみて肩に引かけ、さらはと主人の家を出てゝ故郷へと出て立ちたるが、長途の旅に、重き金塊を負へるとなれば、忽ちに疲れを催し、兩足交も〳〵引すりつゝ往ける處に、向ふより馬に乘れる人の愉快に活潑に、面白けに進み來るを見て、ハンスは思はず叫ひ出てぬ。「馬乘はさそ面白きとなるべし、椅子に腰かけると同樣、履の外は、石も蹈まず、地を歩かす。知らぬ間にヒヨコ〳〵と往けは」と。

そを聞きたる馬乘りは、ハンスを見て、「ハンス、ハンス、御身は徒歩にて何をかしてある。」ハンスは答へて「余は此金塊を負ひて、我家まて歸る處なり。こは金の塊には相違はなけれど、これが重さに頭さへあがらず一歩一歩、鼻拭肩に喰ひこみて痛さに堪えす」と。馬乘りは手綱ひきつゝ「さらは我よき事を御身に敎へん。いかにやハンス、我馬を御身に與ふへければ、御身の金塊を我れに與へて、双方交易と出ては如何に。」「妙、妙」と、ハンスは手を拍ち「我が爲には極妙なれと、御身は徒歩してこの金塊を負ひ往かねはなるまし」と。云ふ内に、馬乘りは馬より飛ひ下り、ハンスが肩より金塊を受け取り、ハンスに馬背を助け乘せて、手綱をは渠に渡して曰ふ「走らんと思ふ時は、フーブ、フーブと舌うちして馬を催かせ。」

金塊を馬に代へ、身は羽の如く輕きを覺え、然も馬のゆる〳〵歩み出てたる時、渠は愉快に堪えさりけるか一哩はかりゆき、さて一馳馳て見んと、舌をならして

フーブフーブと呼はりければ、馬駈け出てゝハンスは落ち路はたの池のほとりに投こまれぬ。

馬は逸散にかけゆきたるか、向ふより出てくる牛おひ百姓、そを捕へて、ハンスか前に曳き來りぬ。ハンスは辛うして起きあがりしが、したゝかに足を打ちければ、傷み處をさすり〳〵牛おひに向ひて禮をのへ「馬乘るほど痛いとはなし、別してかゝる惡馬に乘るへからす」余は誓つてまた馬に乘らし、余は牝牛を曳ける御身を羨やむ、御身は落ちて怪我する危險もなく、ゆる〳〵と牛の後にあるくの愉快あり、牝牛よりはいつにても牛乳をしぼり得へし。余は御身の牝牛を我が馬と交易せんとを欲す」と。

百姓はほく〳〵と打笑み、「御身たによしとならは、御身の馬の代りに牝牛を進せん」と、こゝに約束整ひければ、百姓は馬背にヒラリと打ち乘り、以前の馬乘の如く、快活に乘り往くをハンスは見送り、「やかて見よ、落ちて痛き目を見るへし」と。自個は牝牛の手綱を執りて、「さて是より、パンにたに事欠かすは、牛乳バタは餘りあるべし、途中にて渴きを生せは早速しぼりて牛乳を得へし、妙々」と、轉た其好運を祝しつゝ、ゆる〳〵と牛後に隨ひて往きぬ。

同し樣なる田舍路をめくり〳〵つゝゆくほどに、見すぼらしき田舍町ありて、こゝにさびれたる逆旅ありければ、立よりて午餉をしたゝめ、猶ほ行くほどに、恰かも夏の日中にて、歩くほど我影を減し、炎熱愈烈しくして、流汗愈堪えかたく、隨つて渴を覺ゆると口中の唾乾きて、舌の喉にヒッ付きて離れぬほとなりしかば、こゝそとハンスは、路傍の樹にシカと牝牛をつなぎ置き、桶の代りに帽子をさし出して乳を絞りぬ。されと一滴の乳も出さりき。無論の事なり。乳を絞るにも絞り棒あり、渠絞り樣を知らす、無暗に牛の乳首を執へて握りしめければ、牝牛は怒り、其の後足をあ

げてシタヽカに渠の頭を蹴たれは、渠は地上に蹴倒されて一時氣絶の躰なりき。

不幸なるハンスが我に反りて目を開きし時、一人の翁渠を勞はり居るを見き。翁は片脇に美しき鳥を懷けり。ハンスはツク〲其鳥を見て、美しき鳥と思ひ、其鳥の名を問ひしに、翁はこは鵞と云ふ、觀るに美しく、食ふに旨き鳥にて、子供の洗禮を受けたる祝ひにとて購ひ歸るものなることを告け、猶ほ鵞を渠に持たしめて、其の如何に肥滿して斤目あるへきやを云ふ。ハンスは手もて鵞をかゝへ、いかにも肥えて斤目ありと思ひき。然れとも渠は直ちに叫ひて曰く、「斤目より云へは、我が牝牛の方幾倍勝れるかも知れす」と。同時に翁はシク〲と牝牛を見たるに、忽ち頭を打ちふりて曰く、「否々御身の牝牛、恐らくは正品にあらす。御身は何處より此牝牛を買來りしや」。ハンスは答へて「買しにあらす、我が馬と代へたるなり」「馬とや、して其馬は」、「馬は我頭ほとの金塊と代へたるなり」。「ナニ金塊とや」。「して其金塊は」。「我か七年間奉公の報酬なり」。翁は聞てうなつき、「よしよし、御身の交易は都度〲御身に好運なり。然れとも余が云ふ所を聞き玉へ、昨夜此村の長の牛小屋より、一匹の牝牛窃まれたりとて此村は今詮議最中なり。余は恐る、御身の其牝牛ならんことを。若果して然りとせば、トテも角ても、暗き獄に入らねはなるまじ」と、嚇しければ、ハンスは忽ち色も靑ざめ「左樣の事か、如何にせは助かるへきや、御身には定めて善き思案あるべし、何卒して其危難より助け玉へ。御身願くは其の鵞と我が牝牛と取り代へて賜はらずや」と、手を合はせて歎願したるに、翁はいと氣の毒の躰にて、「余か其牝牛を執りたりとて、迚も遁けヲヽするとも覺つかなけれと、御身の急場の爲なれは云はるゝ如くせん」と、鵞と牝牛とを取り代えて、また最の牛追の如く、手綱を執りて悠々として追ゆけり。』

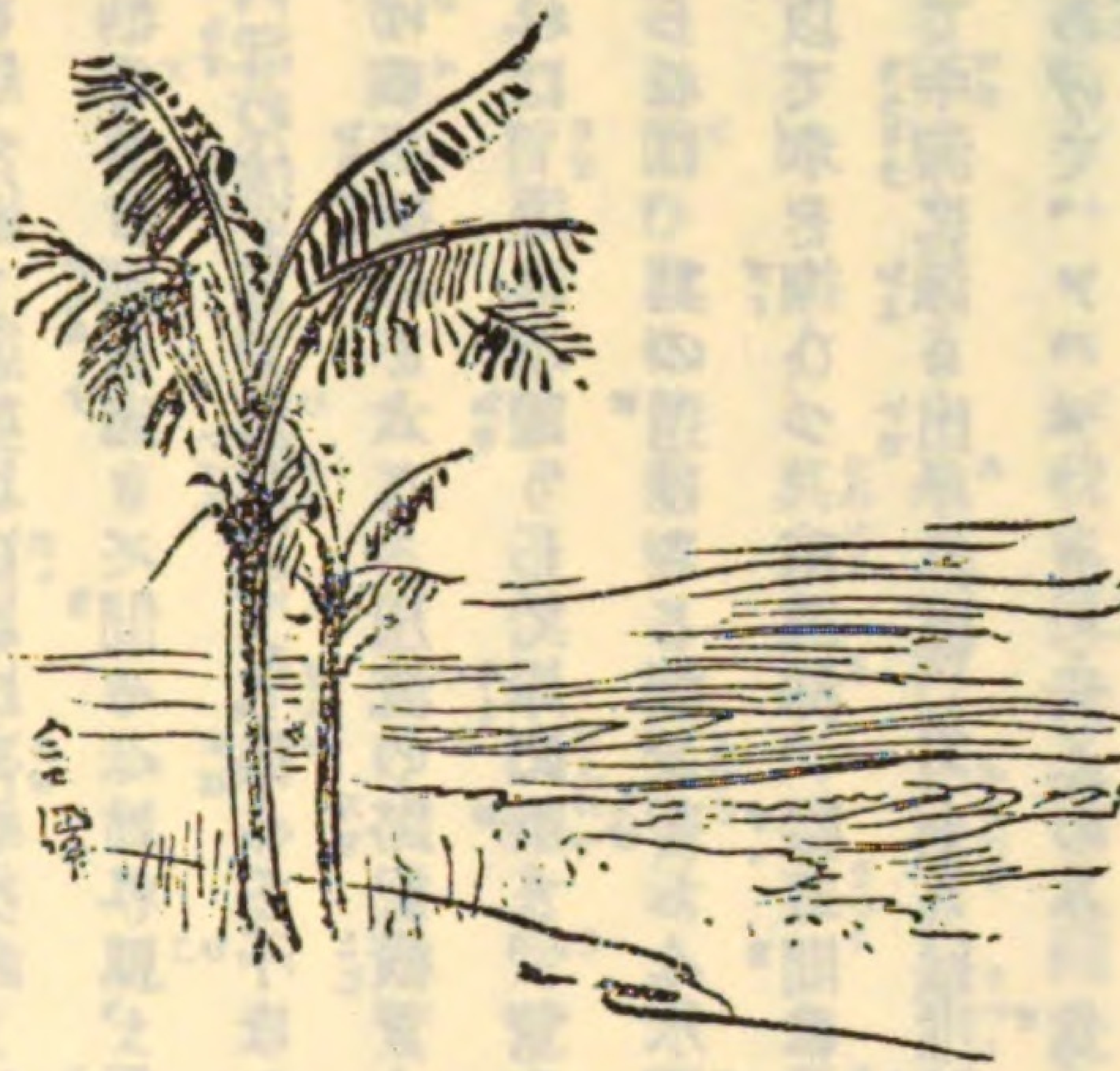
痴児ハンスは不正の牝牛、入獄の危難を免かれ、然も美しき鵞を得て、其都度好運なる交易を思ひ、鵞を撫て丶先つ最初に、頷も落つへき其焼肉、次には油滴、滴たる其ソップ、次には其美なる白き羽にて作れる枕、如何に心地よく寝らるべきか、母も必ず満足し玉ふべじと思へば、渠か足は思はず進みき。

然れとも日頭を過ぎて間もなければ、暑さ少しも減せす、汗の流る丶と泉の如く、渇くと干ほしの蟹の如くなりける折柄いと大なる川流の路を横ぎりて流る丶ありければ、渠は小躍りして岸に下り、鵞の水鳥なるとを知らねば、其の逼けさる様、暫らく水上に浮へ、両手を以て水を掬ひつ、両三杯、啜る間に、鵞は羽たゝきして中流に泳ぎ出ければ、ハンスは唯呆れ果て丶、手をあげて、ア、ア、アと云ふのみ、爲ん術もなく佇み居たるか、忽ち手を拍て快呼して曰く、是れ迄屡々傷み苦しみ、飢へ渇きしも、荷物と云ふもあれはなり。今は凡て是等の負擔無くなりたれは、足は輕く、身は自由なり、走りても歸るへきなり、氣味よき哉心地よき哉七年の奉公を無にし、母への土産を失ひたることを躍りあがりてそ喜びける。

或る人はハンスが交易すきなるを咎め、或人は渠か容易に欺かる丶を非す。然れとも一層深く觀察すれは、渠か痴なるは、物の性を知らさるに在り。物の性を知らさるか故に、物の用を知らさるなり。物の用を知らさるが故に、凡ての物皆我か用やらすして我か累となり。凡ての物我か累となるが故に、凡て他の用たる物を羨やみ随て交換の念起り、交換するものなければ、甘して棄て去るに至る。是れ獨りハンスが痴のみならず、一般の痴人の痴なり。



捨小舟



彼女が望郷の視線を遮りたりし海上萬里の雲は幾度か消えて幾度か顯れたれども、彼女はあらず。彼女が磯洄の砂に留めたりし可愛ゆき足跡は時代の波に洗はれて痕なけれども、彼女が朝々の思ひは盡きず。漫々たる海を隔てにし三千里外の異つ境にて、便りなきさの捨小舟・誰によるべの夜となく晝となく、椰子樹葉茂き處、故國に似たる風物もなし。家は日出の彼方に在れども水天涯なく、故國の天を出る日は日々空しく西に流れ、故國の海に昇る月は夜な／＼つれなき袂の露に宿る。

鬼界島に棄てられたりし俊寛は千歳悲話を傳へたれども、彼は堂々たる一男子にして而も出家桑門の人なるに、此はかよわき乙女子の閨中春温かに浮世の風も知らぬ身の上なり。瓜哇島の草木枯れて島はすべて乾砂となるも、彼女の思は已まじ。印度洋の水渇きて亞細亞大洲の南干潟となるとも、彼女の悲は絕へじ。彼女の罪は彼女の血の異なれる人種を雜へたるに在りといはれにき。彼女は母を長崎の人に有したれども、父は和蘭の某なりしなり。寛永鎖國の前後、此の父母の間に生れたる彼女は、名をはるといひ、長崎の一頁家にて母方によしみのあるが許に養はれ、物習ふと、書讀むこと、何不足なき敎育の下に、蝶よ花よの春を送り迎ふること十四回なり。

彼女は其島娜なる蕾の花の姿を以て、其慧敏なる才情を以て、人々の親愛を一身に鍾め、羨望の中心點となり、幸福の氛圍氣に包まれつゝも、無邪氣の間に人となり、罪なき此日を過したりしなり。然るに意地惡き嫉妬の風は何心なく輝ける春に咲出んとせる此の蕾の花の手弱き枝を打搖りて容赦せざりき。

寛永十六年、平戸長崎に在る紅毛血脈のもの十一人之を咬𠺕吧(瓜哇)へ放流すべしとの令下りぬ。長崎より歸帆すべき和蘭船は、今や其錨を拔かんと欲しぬ。泣きくづをれたる彼女は、送りの人に護せられて船に移されぬ。

嗚呼船よ、心あらば重ふして動かざれ。嗚呼風よ、心あらば此帆を逆に吹け。

斯くて無情の陸は次第に後ずざりして岸上の人豆の如くなりぬ。斯くて無情の船は次第に遠ざかりて甲版の人海霧の中に沒しぬ。長崎浦の邊雲悠々たり、天草洋の烟波片々たり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

それより三歳過ぎにし時、海南の天を破りて長崎灣に突入したりし和蘭船は、彼女が一封の書を齎らしける。

千はやふる神無月とよ、うらめしの嵐や、まだ宵月の空も心もうちくもり、時雨とゝもにふる里を、出しその日を、かきりとなし、又ふみも見じあし原の浦路はるかにへだゝれどかよふ心のおくれねば、

おもひやる、やまとの道の、はるけきも、
ゆめにまぢかく、こえぬ夜ぞなき。

御ゆかしさのまゝ、腰をれかき付〳〵。前業とは中ながら、かゝるうき世に、かひなき命ながらへ申さむよりは、たゝ世になき身となり候はゝ、いかにうれしからましを、たま〳〵花の世界にむまれきて此身となれるとし月をかぞふれば、十とせあまり四とせがほど、とこそおぼへ候に、かくうらめしき遠き夷の島になが

されつゝ、きのふけふとおもひながら、はや三とせの春もすぎ、けふは、卯月朔日、また東雲に、あすは出船と人の聞えつるに、せめて筆の跡してもとぞんじ、なみだながら硯にむかひまゐらせ候。いまだ夜ふかきほどにて、いたしくらければ、ともし火すご〳〵とかゝげつゝ、おもひ出る事共かきつくるに、此文のうら山しくも、古郷にかへこよと思へば、我文ながらありしより、げにものかなしくて、

　みづくきの、あとはなみだに、かきくれて、
　　むかしをいかに、人の見ましや。

はづかしながら、筆にまかせまゐらせ候。そこもとよりの御文、ことに御いんしんとだえまゐらせ候。まづ〳〵御つゝがなく、御ざなされ候よし、めでたくぞんじまゐらせ候。さて〳〵そこもの御文くりかへり見まゐらせ候へば、ひとしほ〳〵御なつかしさ、御すゐもじなされくださるべく候。わが身は、いまにつれなきいのちにて、ながらへまゐらせ候。いつのとき日にか日本をいでまゐらせ候や、いまは、さだかにもわきまへがたう、こなたのとし月にはなぞらへがたく、たゞよるひるとなく、ふるさとのこと、つかのまもわすれやらずおもひなぐさむひまも御ざなく候。たま〳〵故郷にて見申たに、おなじものとては、月日のひかりばかりにこそ、そこもとにかはらず候ゆゑ、ひるは、日の出るかたをながめ夜は、月の出るかたを打ながめ、袖のかはくまも御ざなく候。かゝる憂世にながらへて、かへらぬむかしをこひしやとのみおもはんより、たゞ此世になき身ともがな、とこそいのりまゐらせ候へ。さりながら、又うちかへしおもひかへせば、世をも、人をも、うらむべきにては御ざなく候。幾萬づの人が、此世にむまれきたる中に、我身いかなれば、異國の人の子とむまれ出たる事も、前の世のむくいありてこそ、と思ひまゐらせ候。しからば今さら世をも、人をも、うらみ申ましき

事にて御ざ候。もにすむ虫のわれからと、ねをこそなかめ世をば恨みじと、二條の后もつらね給ひし承り候へば、いさゝか世をも人をも恨み申さず。われからとなくより外は御ざなく候。さりながら、此まゝにてはてなんとは、存じ申さず候。たゞ一たび神や佛の御あはれみにて、日本へ歸申べしとこそ思ひまゐらせ候。たとへ三日をすぐし侍らできえ果まゐらせ候共、いさゝかくるしからず候。とかくすゑは日本の土となり候はんとぞんじ候〳〵。あはれ、あはれ、神や佛の御はからひにて、今一度御げんに入申たく候と、くれ〳〵念願にて御ざ候。もしも又此世にて逢申さず候はゞ、わが身かね〳〵申たるごとく、友だちは、七世の契と承り候へば、かならず〳〵來世にてはめぐりあひ申べく候。げに〳〵御かたみの短冊、又をし鳥の羽など、かた時も身をはなし申さず持候〳〵。必ず〳〵來世にては、これをしるしにてめぐりあひ申べく候。

又ぞや、わが身花だんはなとおほせられて、御みせなされ候こそじつこゝろなくきえかへりまゐらせ候。此花のさはりには、そもじさまとこそながめまゐらせ候にかれ〳〵になりはてゝ、ひとりながむる山吹の、とへとこたへぬいろなれば、そさまの花の袖の香に、おくれし夢の面影を、見ることとたにも、まぼろしに、あふはあふかはもろ共に、つひに消なん露の身の、われや先だつ人やおくるゝ、うらめしや、ありし世にだに、戀しきを、めかれなく契まゐらせ候はで、今は何事もみなあだごとゝなり行、むかし語と成まゐらせ候事こそふかき思ひのたねとあこがれ候〳〵。あらこひしのそさまや、しのばしの友人や、ひと〳〵二重の色のみか、やへ山吹をおくり給ふ情いろくちはてずおもへその、御心のうちとこそおしはかられまゐらせ候。

山ぶきの、花の千しほは、かはるとも、
いはぬいろをばわれわすれめや。

われらこゝろの中、いさゝかゝはりなふ、くれくれおもひまゐらせ候。

なづかしや、こひしや、故郷を出しは、いつの時日にやとおもへば袖のかはくまも御ざなく候。いやしき夷の島にすむとても御おもひすてくださるまじく候。わが身の露は秋の田の穂のうへてらすいなづまの、光のまもわすれ申さず候、折から雨風のそよぐにつけても御なつかしさおぼしめしやられくださるべく候。あまり日本のこひしくてやるかたなき折ふしは、わたりの海原をながめ候より外は御ざなく候。げにや古き歌に、

大ぞらは、こひしき人の、かたみかは、ものおもふごとに、ながめこそすれ。

と讀し人までも、身の上におもひあはせまゐらせ候。又すぎにし彌生三日の日、家の內の女ぼう達、みな〳〵あそびに出られ候に、わが身もさそはれ候へ共、參り申さず候。それにつけても、そのもとの御事共おもひ出まゐらせ候。そもじ様へ、かやうにわかれ申事、かねてより存じまゐらせ候はゞ、よるひるとなくはなれ申さず、なれむつび候はん物を、いつまでもとおもふものから、有のすさびにもてなしまゐらせ候事、今さら心にかゝりまゐらせ候。

わするべき、時しなければ、むば玉の、よるはすがらに、ゆめに見えつゝ。

と、古きことの葉におしはかりくださるべく候。細〳〵申入たき事。濱の眞砂のかず〳〵候へ共、あまり〳〵心みだれ、あとさきわかちかね候まゝ、あらまし申まゐらせ候。助右衛門様、九郎様同じことに申まゐらせ候。又ぞや、とうぜん町おかた様へ、文まゐらせたく候へ共、出船いそぎ候まゝ、そへ筆申まゐらせ候。おたつ様へ申入候。何とて御文こま〳〵とあそばしくだされず候や、心もとなく存じまゐらせ候。かならず〳〵此船のかへさには、御文委しくあそばしくださるべく候。

まことに、我身居申時とおぼしめし、きくを御見捨くだされまじく候。かならず／＼秋の頃は、こま／＼との御文まち入まいらせ候。何ぞゐんしん申たく候へども、めづらしき物も御ざなく候まゝ、その儀なく候。心ざしばかりに、おび一すぢおくりしんじまゐらせ候。もはや日本の花などは、みなみなわすれ候まゝ、あらましおぼへ候ものばかりぬいまゐらせ候、もし人の笑ひ申候はゞ繪そらごとゝおほせ候へかし。又／＼平吉様へ申まゐらせ候。御無事のよしめでたくぞんじ候。ことに御文うれしくおもひまいらせ。しかれば、何とて毎年御文くだされず候や、それのみふしんに思ひまゐらせ候。たとへそれがしかたへ文たまひ候はずとも、御心ばかりとは存じ申さず候。かまへてかまへて此便には御文こま／＼まち入まいらせ。かやうに申候も、せめて御筆のあとなりとも、とぞんじ、ながめまゐらせ候はんまゝ、こま／＼とあそばしくださるべく候。あらむかしこひしやかしこ。

一おたつ様へ申まいらせ。爰もとあつき國にて候ゆへそれより少持わたりまゐらせ候を、みなみな、つかひきり候まゝ、ひよーぶきやう一かへ、此便にて[illegible]らせ候。細／＼申度候へ共、筆には、つくしがたく候。下のうばへも申まゐらせ候。ずいぶん／＼そく才におはし候へ。わがみもやがて歸朝いたし、御げんもじにて申まゐらせたく候。あら日本戀しや、ゆかしや、なつかしや、見たや／＼。一松かさ　この手がしはのたね　杉のたねはうきぐさのたね　御ゐんしんたのみまいらせ。かへす／＼なみだにくれてかきまゐらせ候へば、しどろもどろにて、よめかね申べく候まゝ、はや／＼夏のむしたのみ入候。我身事今までは、異國の衣しやう一日もいたし申さず候。いこくにながされ候とも、何しにあらゑびすとはなれ申べしやあら日本戀

しや、ゆかしや、見たや〳〵〳〵。

じやがたら
はる方

日本にて
おたつさま　まゐる

家　政

下女を使ふに付きて心得べき廉々（續）

亂暴を顧みざるもの

無駄なる薪炭をどし〳〵と燃して顧みず、無益なる燈火を點して、何とも思はず、或は小さき事ながら酢、醬油、味噌、鹽の出し入れ迄、所謂亂暴にして顧みざる下女あるか、是等は彼等の大低は知らずしてなさゞるにあらず。そのあしき事は知りつゝも、そを一々精細になすの手間の、己れに一分の益なきを思ひて、かく爲すものありし。或る人はかゝる下女に出遇ひて面白き一法を試みし事あり。即ち下女に申し渡たして云へる樣、今日以後何ヶ月の間、汝が注意より集むる處の紙屑代價の何分は、汝に與ふべし。又炭、薪、酢、醬油の如きも今日迄の平均額に比して減ずるを見ば、その減ぜし高の何分を分つべしと。かく申し渡してより窃かに下女の擧動を見ば、見ゆると見へざると、大に前に異なりたる處あるを見たりと。さて約束の時期に至りて之を改め見るに、下女の或るものによりては、或は一割、或は二割、或は殆ど三分一の差異を生ずるとあり、かくして半年もしくは一年の間敎へ込みたる習慣は、たとひその者より前の規約を解きたる後と雖も必ず成功あるを見ん。これその一法として參考すべき事なり。

仕事のはか〳〵しからざる時

中には信實に働けど、働のにぶき者もあれども、十中七八迄は、爲し得べき力量のあるを惜しみて、怠まくるもの多し。これ畢竟限りもなき多分の仕事を與へ、一つを終れば一つ出でて、仕事のつくる處なきが故に所謂張合抜けて骨惜しみするもの多し。かゝるものには仕事の種類を區別し一定して、之を渡しその仕事のすみたる後は、自分の勝手の事を爲すを免すべし。かくして定めをかば、事務ははか／＼しくはかどるを得べし。

癖に付きて

無くて七癖と云ふ位なるを、癖多き下女に出遇ひては、話しにもならざるとあり、或は鼻水をすゝるの癖、或は朝起きて顔をあらわさるの癖、或は下卑なる言語を上に向つて使ふの癖、或は膝をくづすの癖、或は物品を足にて動かすの癖、人の物を見たかるの癖、出しやばり口をきくの癖、其他一々數へ盡くす能はざる程多くの癖あり。性質、温良なる者は、それ等の癖を傍より正すに隨つて直ほすと雖も中には恐にして、一度々々に云ひ聞かすにあらざれば、容易に直ほらず。甚だしきに至りては強情にして、反て上にさからふを興あるとに思ひ、わざと直ほさゞる者あることあり。強情なる者に付ては、その強情を破ぶるに足るべき德話を聞かしむるも、最も大切なるとは雖も、或る人は面白き一法を試みて、大に成功を奏せり。その法と云ふは兼てその下女が有する惡しき癖を、一々書き記し置きて、一枚を下女に渡し、一枚を自分にてひかへをき、さて下女に云ひ聞かしむる樣、汝の癖の内、是非改むるを要するは、是れ／＼なり。汝がこの中の一つを犯かす毎に、余より金一錢を出して與へ、その犯したる事項の上に、汝の書き付けの上に記しを爲さしむべし。その代りには汝その事を再び爲す時は、余の持てる書き付けの上に記しを付けて、先きに與へたる金錢を返

納せしむべし。三度同じ事を犯すに於ては新らたに汝より一錢を取るべし。四たび五度と犯す毎に一錢づゝを汝より取るべしと。かく定めて嚴重に之れを實行する時は、大ていの愚人も大低の强情者も、金錢には代へられざるものと見へて、その日より打ちかはりたる如き者となれり。それを手始としてたとひ書き記さゞる悪癖ありと雖も、注意は之を改ためしめ、一月ならずして悪癖後を斷つに至る。

前途に望みを抱かしむる事

下女七癖の原因は、多くは前に見る處の望みなく、先きに進まんとするの希望あらざるか故なり。此故に使はれずば、彼の家ありと云ふが故に、亂暴をなし、主人の事を思はざるが如きとをも爲すなり。先きに見る處の望みなきが故に、汗を以て得たる報酬を、無益なる菓子、髮の飾等に費やしはつるなり。行く／＼は良家の妻君ともなりて、少しも出世せんとの目的あらざるが故に、禮義を何物とも思はず、反てうるさしとす。身をたしなみ人より輕蔑を受けざらんとを望まざるか故に、おしやべりと不始末に心をはけづ、いねむりを爲す暇に文字の一つも覺へんとも思はず、しか／＼と働きて無益なる時間を、經濟せんとも思はず。たゞ今日のために生き、今日のために食するに過ぎざるものあり。是等の者には人間の進歩すべきを說き、心かけの次第にては、反て下女程經驗を得、下女程物の種類を覺へ、下女程上達の望み多きはあらざるへきを敎へ、汗の價を以て無益の事に費やすべからざることを話して、何にせよ將來と云ふとを望ましめざるべからず、冀望のためには、大切のとは堪へ得へければなり。

下女の事を長く／＼しく研究して之れが爲めに力を盡くさんは、愚なるに似たれども、一家幸福の三分の一は、殆と下女の掌中にあり。下女善良にして、主婦の命守り、水車の滞ほりなきが如く、思ふまゝに廻る

きは、一家の內輪よりの幸福にして、不快の聲、怒りの聲は、聞きたくも聞くを得べからざるに至るべし。之に引きかへ下女主婦の命を守らずして、事務澁滯せば、主人は主婦を叱かり、主婦は下女に憤ほり、一家不平の絶へ間なかるべし、故に下女のことは、中々に見過ごすべき問題にあらざるを知らん。今や新暦の盆に近く、下女出更はりの期に近かずけば、格別下女のことは心得をくべきなり　（終）

流行病と家庭

夏に於て最も恐しきものは虎列剌、赤痢の如き流行病なることは何人も知る所なり、然るに今春より一葦水を隔つる支那廣東及び香港に黒死病と稱する惡疫流行し、其勢甚だ猖獗にして當るべからず、近來は一日に百餘人の人類を斃すに至りしは皆人の知る所なり、而して此黒死病に罹るものは全體黒色となり衰弱して死するに至り、早きは發病より二三時間にして死し或は三日五日間位の間に斃るゝものにして、一度此病疫に罹さるゝ時は大概治療の望なく、且つ一度流行し始むる時は春夏秋冬の區別なく到底過止する所を知らず、昔時東洋諸國にては二千四百萬人を斃し、佛蘭西巴里にては住民の半數、意太利フロレンスにては住民の强半を死に至らしめたりと、其害毒コレラの比類にあらず、幸ひにして未だ我國に傳染せず、又將來と雖もかゝる不祥の我國に來らざらん事を切望すと雖も、香港と横濱港とは直航にして一週間にて往復し得、且つ朝鮮事件により今や日清韓の交渉切迫し、我國よりも兵士軍艦を派出するに至りたれば、何時我國に傳染し來らざるも量るべからず、此際横濱港にて嚴重に船舶の撿疫を爲すも、之にのみ委頼するは智者の業にあらず、黒死病の原因（北里青山兩博士之を發見したり然れども青山博士は不幸にして此病毒に感染したりと國民は

此義人の速癒を祈らざるべからず）不潔の場所に發生し不潔の場所に舍り、不潔不養生の人を冒すなりと、されば玆に其豫防法を記すべし、但しこれは黒死病に限らず、虎列剌赤痢の如き病毒を遏止するに大効ありと知るべし。

臺所は不潔物の製造場とも稱すべき所なれば、一家中尤も注意すべき大切なる場所なり、然れば食時の都度掃除を能くし皿、鉢、膳、椀の類及び戸棚の中は時々熱湯にて洗滌し、黴等の不潔物の生へざるやうにし、床下に至るまで能く掃除し濕氣のこもらぬやうにすべし。

流し下は魚類や野菜の切り殘り又食ひ餘しを捨つる所にして、これより惡病の一大原因となれば能々流し下の掃除を怠らず、掃溜の入物は少なくも日に一回乃至隔日に石灰又は燒灰を撒布するが宜し。

大なる掃溜ある家にては一週間に一二度若しくは三度位必らず取除きをなし其跡には石灰を撒布し置くべし。

下水及び溝等は塵芥の溜らぬやうにし、流れをよくし臭氣の發せざるやうにすへし。

風呂場手洗場なども其排除口に注意し、汚水を土地に吸込して濕氣を生せしむへからず。

便所の掃除も充分清潔にし肥料取に幾回も汲み取らしむべし。

井戸の水は一度煮沸したるものを飲用すべし。

家の部屋々々は、良く掃除し風通を能くすべし。

衣服は洗濯して垢つかぬ濕氣なきものを着すべし、

入浴行水は日勤すべし。

腸胃の微弱なるは惡疫の發生する好田地なれば腸胃を健全にし置くべし、暴飲暴食最も謹むべし。

群集の場所譬へば多人數の集會、劇場等には近寄らぬが得策なり。

帆立貝及其細工

今や海水浴の時節となり、避暑の爲め衛生の爲め海水浴を好む人士は孰も海濱に行きて消夏の遊樂を爲す、海濱には種々吾人に利益するもの多し、其中何が最も利益あるか、何が海波によりて吾人の脚に觸るゝか、美しき貝殻か、藻草か、海綿か、海燕か、假殻蟹か、曰く帆立貝是なり。

帆立貝は二枚貝の軟骨動物にして、其形扇に似たり、故に扇貝の名あり、左殻は稍平坦にして右殻は稍丸味となれり、其形其色各異なり茶碗皿の如きものあり、ペタ皿の如きものあり、其種類は千態萬狀百八十の多きに及び、意太利地方の或地層の中に四百以上の化石したる帆立貝の種類あるを見ても世界到る所の海濱に發見せらるゝを知るべし、帆立貝は大低餘り深からざる海(深三尋より四十尋の處)に生活し、海藻の中に居るものなれば、時に晩夏の頃暴風に遇ひて海岸に打ち揚らるゝ事あり、而して彼等は一所不住の生類にして時候等にも關せざるなり、帆立貝の殻は美麗なりと雖も、其中なる主人公軟骨動物殿も甚だ美觀あり、彼等が外界の事物を見る爲に兩殻の外に顯はす數「マンツル」(主人公の)の端にある數百の眼の輝く時は其美麗一帶に虹を曳くが如し、彼等の幼稚なるものは、兩の殻を開きて敏捷に海上を走ると雖も、少しく古老を經るものは猥に口を解かず、沈靜なること石の如し、これは最早成長を遂げて食餌を求むるに急ならず、又年長けたれば幼稚の如く小兒らしき遊戯を好まざればなり。』

帆立貝の生殖するは、夏の間に起り九月頃までに至る、秋の間は生育速にして冬の來ると共に其の發育を止む、次の夏に至り(滿一年)再び發育を始め、秋の頃に至り稍肥大となりて食に堪ゆるに及び、其住居より漁人に漁獲せられて人腹中に葬らる、其漁獵法は西洋

にては大抵船より引網を用ひて捕へ、短き「ナイフ」にて其肉をくり取りて食用となし、又は箱、桶に詰めて外國に輸出するあり、其肉は美にして味宜しく一種の香氣あれば、「フライ」（油揚）にしても煮附にしても酢漬（赤貝を酢のものにするが如く）にするも共に口舌に適へり、世界に帆立貝賣買の場所は、亞米利加ニユー、イングランド州及ニユーヨルク市場は其最も有名なる所なり。

帆立貝の漁場に於ては其貝殼（肉を去りたる）山の如く積み重ね或は田地の肥料となり、或は道普請の砂利の中に交はるなり、又若し漁家に行きて其家側の貝殼推疊の中を見ば必らず帆立貝なるを認め、或は海濱に行きて一見せば淺海の中に彼等の群居するを認むべし。

帆立貝の貝殼は其色種々にして、稍平なる片殼は白色淡光あれども、時としては兩側共に白色、橙色、赭色、淡紅色、紫色及其他の色ありて人の眼を喜しむるもの尠からず、さればこれより此貝を以て如何なる細工の出來得べきかを說明すべし。（未完）

手藝案內

簡易染法（日本染法）

日本染方と西洋染方の二法あり、一は舊來の染方にして草根木皮の類を用ゐ、一は新規の染方にして藥液化合の作用に依る、茲には簡易染方則ち日本染方の事を記すべし。

江戸茶染――楊梅の皮と榛の木の葉を合煎し、五六遍程染めて後少許の明礬を溶きたる水中に浸入し置き後乾すべし。

黑茶染――下地を藍にて濃染し、其上を楊梅皮の煎汁にて染る事六七回に及び、其の殘液に浸す事半時間の後一旦絞り上げ、之を田澁（田の畝又は谷川に流れ出る鐵漿色の水）か左なくば泥水に浸して取り出し暫時

の後絞りて天日に乾すべし、楊梅皮に代用するに楢皮を以てこし泥水に代ふるに淡き鐵漿を以てするも宜し。

焦茶染――江戸茶染の如く楊梅の皮と榛の木の葉とを煎し五六回染めて明礬に代ふるに緑礬を以てするがよし。

黒染――下地は楊梅皮を細碎し、煎して七八回染め其上に泥を塗り天日に乾す、下地の濃き程黒色を得ると知るべし。

天鵞絨染――下地を濃き花色に染め其上に山楪皮の煎汁をもて染むべし。

赤染――これは一寸素人の手にては困難なれども出來ぬ事はなし、蘇木五十目黃蘗十五目楊梅皮十五目肥松十五目竹葉十三目を鍋に入れ、水三合を和して一合五勺程に煎じ詰其汁を他器に移し、其アトに水三合五勺を加へ又一合五勺に煎じ詰め、之を別器に移し、又四合加えて同じく一合五勺に煎し詰め三度の煎液を一緒に合し、之に明礬七匁を粉末にして混し三五回染むべし、之は七雨染とも云ふ。

柏染――黒染なり、先づ柏の葉を取りて煎し此中に浸し染むる事少時にして又黒泥に浸し暫時に洗ふべし。

梔子染――梔子の木皮と實とを刻みて水に浸し置くこと一夜、能く揉みて後布袋にて漉し、滓を去り其汁もて染め天日に乾すべし。

以上の如し目下染物の時節に遭遇す、舊物を變して新らしき色澤を添ゆるは此の時にあり、舊物の布帛はよくよく洗濯したるのち右の法によりて染めて見給ふべし。

夏手袋

夏手袋の製作には、編針(針)をもて「メリヤス」編の如く糸を掛け一本の鉢に二十つゝ三本にて六十を掛け扨初めは右を二つ編又左も二つ編みて針に糸をからみ一緒に二つ編廻る事一廻にして、又た二廻右と左を編む

なり、四遍目には右を二つ編み左の方にて針に糸をからみ一緒に二つ編むべし、斯の如くする事三寸程編みて後右針の方にて糸一つを增し一本の針にて糸目五づゝ增して元の如く編み又た三つ編み左にて二つ一緒に編進む、斯樣の編法にて二寸編み其方にて拇指を分け、然して糸目二十五を三本の針に都合よく移して五分位編みて止むるなり、又五本の指を編むもあり、普通大人にて股より中指二寸六分位人指と無名指は各二寸四分位小指は一寸七八分拇指は二寸一二分、糸は白の綿糸を用ふるが好し。

養蠶術（續）

前號にて蠶兒取扱の事は終りたり、之より成繭の事を記さん。

上簇法――一々拾ひ取りて上簇室に持ち來りたる熟蠶は成べく早く簇に上すべし、一簇に量多きに過ぐると量りなきに注意すべし、大低簇一枚の分量は凡そ一升にし目方三百五十目乃至四百目位を可なりとす、又た量にて一々量るは煩に堪えずと思はゞ豫め適當の器を製し置くべし、上簇室は空氣の流通を宜しくし死籠等の生せざるやうにすべし、上簇の際天候順を失する事あらば、七十五度位の溫度を與ふべしと雖も、必らず炭火を用ゐ、決して焚火を用ゆべからず、焚火の爲に繭が烟煤に遇ひて其光澤を損し大に其聲價を減す、上簇室は梁上に限るが如く思惟するものあらんが、これ蓋し梁上は一には室の都合に出で二には室內總て暗きを以て、繭の皮肉に厚薄あるものを作らざるが故なるべし、蠶兒は繭內に在りて明暗の一ヶ處ある時は、其明かなる處を薄しと思ひ其部分を厚く作るゆゑ、上簇室は必ずしも梁上に限らず戶を閉め暗くし置く時は能き繭を得るなり、勿論梁上にても差支なけれども、梁上に煤煙等の多きは、大に生糸の光澤に害あるものなれば、煤煙等は必らず拂ひ取るべし、且つ人或は上簇

室は必らずしも暗室に限らずして、間接に注射する光線各部均一なれば、夫の皮肉不齊の繭を作らざるが故に差支なしといふものあれども、未だ其當を得たるものと爲すべからず、それ明室にありては光線を各箔間に均一に注射せしむること困難の業にして、殊に曉天、黄昏の時則ち半昏半明の際は、別して簇内各部に明暗不正の個處を生す、隨て繭皮厚薄の不齊を隨伴すべし、又上簇室は必らず靜穩なる場所を撰み、決して物音等に蠶兒を驚かしむるべからず、若し喧騒等蠶兒を驚かしむる時は、一時繭を作るを止め、且つ吐糸孔縮小するが故に、各皮層粗細不一の糸を吐くべき害、冷氣に過ぐる上簇室と異なる事なし、若し以上陳述するが如き諸害を加へ成繭を妨ぐる時は、繭の皮肉の乾き方漸次に平等不遍なる能はずして、已に全く乾ける所へ又糸を吐く繭層を成すが故に他日製糸の際解舒宜しからずして節の揚かるものありて不良の生糸となり了るべし、最も注意を要すべき事なり、上簇室殊に梁上の上簇室に於ては、尤も注意すべき要件は鼠害の一事なり、鼠が好んで蠶兒を食ふ事は、已に前回に陳述したるが如く、又好んで蛹を取り食ふが故に、蛹を食はんとして繭を喰ひ破ぶることあり、最も戒むべき事なり。

收繭法――收繭法則ち繭搔とは上簇より凡そ一週間の後、結繭を簇より搔き取るの謂なり、詳言せば凡そ一週間の後とせるは結繭後蠶兒の繭内即ち蛹室内に在りて第五蛻皮を了へ、蛹と化するの時期なるを以てなり、故に上簇後の氣候により、結繭化蛹に二日位の遲速あれども、大低四五晝夜にて蛹に化するものなり、但し暖強ければ早く、冷過ぐれは晩るゝ故に其年の氣候暖なる時は、六日目の朝に至れば、二三の繭を取り、之を切り破ぶりて蛹に化せしや否やを撿し、冷なる時は七日目に於てすべし、七日目には大低化蛹して繭搔を執行するを得べし、其搔取法は先づ結繭せる簇の多數

を染上若しくは暗室より取り出し、適宜の室内に置き、一放宛取りて前へ据へ、籠又は乾燥して汚れなき蠶座或は適宜の容器四個を左右に備へ、繭を簇より掻き取り、一器には絹繭を容れ、一器には玉繭を容れ、一器には薄皮繭を容れ、殘の一器には赤繭等の如き多くの不良不正の成繭を容るへし、但し此際最も注意すべきは、流蠶又は薄皮繭の黒汁の爲に他の繭を汚穢せしめざるやうにし、及び簇の芥塵を繭に附着せしめざるやうにすべし、殊に蠶種に製造すべき繭なれば、始終丁寧に取扱ふを要す、若し然かせざる時は、蛹を微弱ならしむるの恐あり、又種繭は重ね容るべからず、然して掻き終はりたる簇は則ち悉く簇を出だし、棒にてたゝき、塵芥及び汚穢物を落し去るべし、掻き取りたる繭は蠶棚に上ぐべし、かゝる手數を終らば養蠶に用ゆる道具則ち蠶室及び蠶具等の掃除及片附をは爲すべし。

社交一斑

流行の栞

春夢

流行の帷子

男物――目下の氣候には白絣上布（六圓より十圓位）最も好適す、之に黒紗の三紋羽織を着せば暑中着には無類と知るべし（價三圓五十錢位）次は例の紺絣上布（八圓より三十圓位）にして次は越後上布（價六圓より十二圓）次は縞並越後（價二圓五十錢より六圓）等にして其他帷子にも浴衣にも兼用せらるゝものは「イギリス」上布又は例の瓦斯糸とす、老人向には越後の錆縞を着用するもの多し、而して通人社會には粋人物帷子として最も流行する絹上布の崩し縞、鹽小紋、淡色の大名萬筋、微塵等を着る。

女物――先づ第一に流行するは前記の絹上布にして（價六圓より八圓）其縞柄はお納戸にして崩し、淡柿に微塵、淡肉に木賊、利久鼠に大名萬筋、貴族鼠に十の字絣、藍氣鼠にひよろけ大名、稍派手なるものに至りては淡藤に楠玉模樣、淡お納戸及紫地に矢絣、遠州絣、井桁絣、淡鼠地に小持縞又は棒縞にして次は好綾縮即ち透絽縮緬（價四圓五十錢より六圓位）にして其柄合は前記と大差なし、其次は越後透屋（價三圓より四圓五十錢）にして淡色の柄合に至りては是亦前記同樣な

ろも地色の濃き所はお納戸地又は紺地の蚊絣、雨絣、井桁絣、等とす、他は男物の部に示せる並越後にして紺地の飛白九分の勢と知るべし。

却説男女を通じて平民的の帷子は、夫の八重山上布(價一圓三四十錢位)にしてこれは地色の淡きものなれば着して涼なるは言を俟たず、他は奈良縞及同紺絣にして其價は二圓前後なれど一見越後に髣髴として素人には區別しかたき所あるなり。

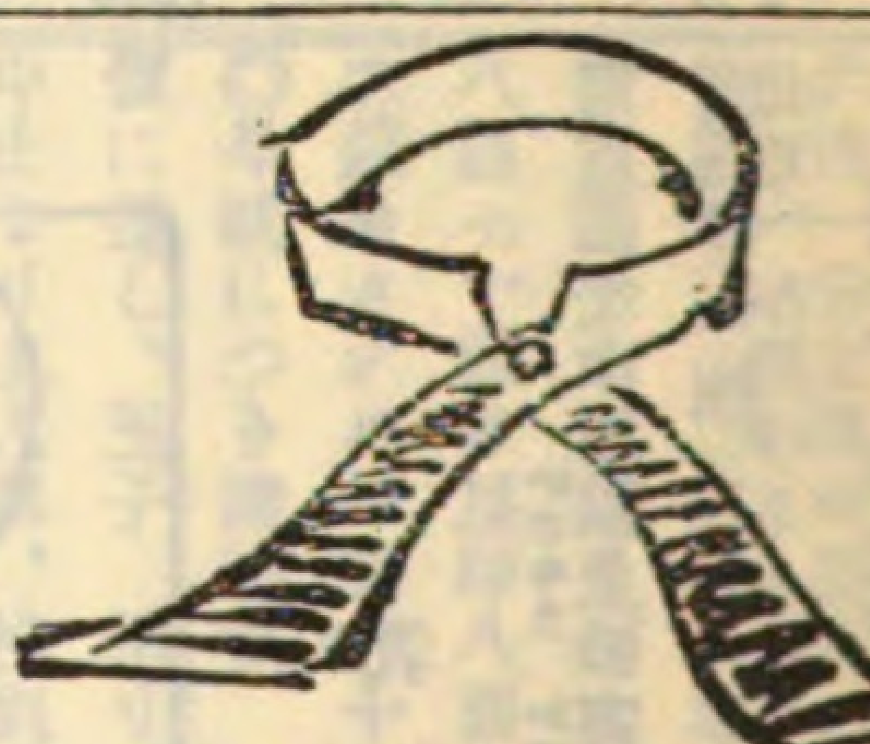
帶

男物——八王子博多の袋織にして(價六七圓)次は本場博多(價二圓五十錢位)の單帶なり、他は絹及木綿の眞田織とす、次に聊か面白きは縞「セル」にて頗る涼に巾を好み夏季の帶として〆むるもの多く見受く、價は僅に八十錢より一圓五十錢位の由、兵兒帶には白の濱縮緬九分の勢力を占む、其價は中巾にて三四圓位(但しこれは兩端に耳の織出あるものにして丈は七尺前後)大巾は五圓前後是亦耳附にして尺は八尺位但し丈を隨意に好めば中巾にて一尺四十錢より八十錢大巾にて六十錢より一圓以上のものを〆むるものあり。

女帶——不斷締には片側黑繻子に更紗縮緬(兩側にて四五圓)次は片側黑に淡色絽又は淡模樣の絽を合して〆むるは意氣を好む流行なり(價四圓前後)晴帶は前號に挿畫と共に記載し置きたれば玆には略しぬ。

洋服 襟(三德カラ)

襟は角襟、丸襟、折襟樣々なれども、夏向には矢張合せ目の明きたるもの流行す、又近來弗々見受らるゝ三德襟とは、圖によりて示さるゝ如く、「カラ」一つにて「チック、タイ」の代と胸當の用を爲す、而して「カラ」は前述の如く夏季なれば最も折返の廣闊きたるもの流行す、此三德襟は丸形にして襟飾の模樣は太き橫縞にして、最も淡泊の色を好む、かゝる德用向のものは却つて價も貴ならず、且つ使用の時も三個一度に「ボタン」に止められ、急用向の人には時間もかゝらず、ちよと輕便の品なり。



三德襟

櫛卷には

櫛卷と申す髮風は實を申せば、決して上品とは申されず、されど日本的の夏季の髮は銀杏と櫛卷に指を屈せざるべからず、櫛卷の輕便にして涼やかなるは決して束髮に劣らず、時間に於ても束髮の半分を費さゞるも、唯惜むべきは中等以上の社會に六適せず下品の性質を帶ぶるなり、若し平民的髮風を何なりやと問はゞ櫛卷に過ぐるものなしと斷言するを憚からず、故に外出の時に櫛卷の髮は如何しく思へども、家に居て不斷の髮には之にて澤山なり。



櫛卷櫛

商家の内儀等は大抵櫛卷にて外用を濟す、櫛卷も奇麗にゆへば左程體裁も惡しからず、之に櫛卷用の櫛と稱して細長きもの(圖によりて示す)を挿して、奴元結でもキチンと〆めて置かば、至つて丈夫向なり、近來流行とも申すべきは、黑鼈甲又は「ゴム」馬爪

等の僞物を以て製したるものに、其兩端に蒔繪又は石目塗を施したるものか（櫛卷用櫛は其眞中は髮に隱蔽せられ居るゆゑ、兩端の蒔繪又は塗摸樣ありさ知るべし）左なくば流行の「はし一塗」なり、此「はし一塗」さ申すは、此品物に限らず、「たぼどめ」にも其他髮具以外のものに用ゐらる、派手ならぬものを好む人は多く此等の品を用ゆ、勿論櫛卷には黃楊の櫛にても差支なけれども、これでは餘りに無愛想至極なり。

岐阜提灯

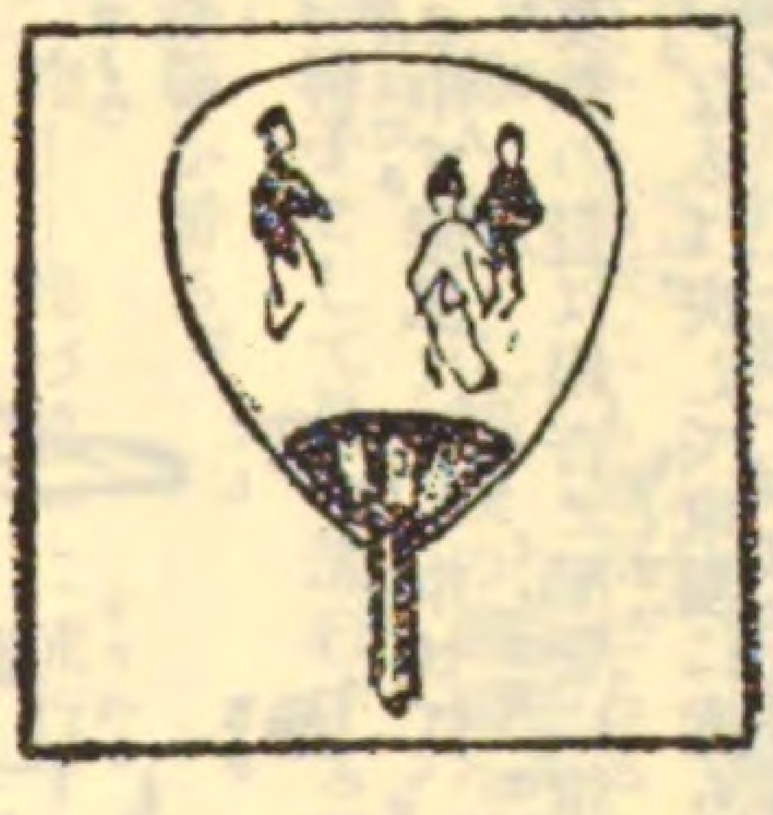
毎年相變らずの形なれども今年の流行は一層淡泊の模樣なり、全躰岐阜提灯は淡泊なる花鳥風月眞に夏の軒頭の眺さするに足れども、東京にて岐阜提灯に模擬して製造するものは模樣甚はだ熱苦しくして色彩甚だ濃厚にして、東京人の氣風にも似ざる所あり、隨つて上等品の需用尠く、一個上等二十三四錢下等は十二三錢よりあり、共に蠟燭を用ゐず、「ひようそく」の油平にして燈心三筋に火を點し終夜を徹すも夏の夜の凉しき業ならずや。

團扇

これも毎年相變らずの形なり、卵子形、棗形共に行はるれども卵子形最も流行、○模樣は千態萬狀にして文人畵最も第一位置を占め、古代の風俗畵等之に亞ぐ、其重なるものは水、草、螢、柳等にして役者の似顏又は東京名所圖繪は、我其東京土產團扇なるを知り、暖簾に「又は○に印あるは、商家の景物團扇なるを知り、棗形に半分ぼかし分にし白ぬき又は紺の定紋あるは問はずして藝者藝人俳優等の御贔負に贈る緋鯛的團扇なるを知るべし、近年鐵道の便開けてより諸所の珍らしき團扇盛に東京に入り込み來る、岡山の夏川團扇、岐阜の鵜飼團扇は其重なるもの、伊勢より入り來るは圓により示さるゝ茄子形團扇なり、伊勢頭音を歌ひつゝ手を揚げ足を躍らす模樣など頗ぶる面白し。



卵子形



茄子形

乳母車

東京にて中等以上の家庭には三四歲までの小兒等を遊戲せしむるに「乳母車」を用ゆるもの多し、乳母車にもいろ〳〵あれども最も行はるゝものは籐製の四輪車なり、之は上に日蔽あり、其下に二人の小兒を遊ばし

め、其の輕やかなるを木製に優る、價は一圓三圓より四圓内外、木製には種々美麗なる製造品もあれども、割合に價上り、多くは一人乗の腰懸に製しあれば籐製の絲附に比し危險なる事あり、孰れにしても小兒は此車に居るも何時までも靜なるを好むにあらざれば、亂母又は母親たるもの、後より推し動かして小兒の心を喜ばしむるを要するなり。



乳母車

日用品物價

◎白米小賣 五日より又々二等米は壹合、三四等米は二合、五等米は四合方引上げたり、則ち(一圓に付) 一等白米七升八合●二等白米八升一合●三等白米八升四合●四等白米八升九合●五等白米九升四合

◎雜穀(一圓に付) 本貫大麥三斗三升●脇場大麥三斗五升●肥後上小麥一斗九升五合●同麥安二斗二升●新船橋小麥二斗〇五合●千葉小麥一斗八升三合●札入竹林麥一斗八升五合並一斗九升五合●上割麥一斗九升〇並二斗〇五合●佐野鳩翼一斗五升●越後大豆上一斗七升●同中一斗八升●同下一斗九升●釜山大豆一斗九升五合

◎鹽(一圓に付) 赤穂三俵八分五厘●大鹽井に八俵三俵九分五厘●本齋六俵一分五厘●新潟六俵九分

◎種油(一樽に付) 地水八圓十錢●胡麻九圓九十錢●淀割十七圓也●井桁八圓七十三錢●桐八圓也●一川八圓七十八錢●久ト八圓七十三錢●イ八圓七十錢●星印八圓八十二錢●いせ宿八圓九十錢●チヤスタ一圓七十六錢●タンゲ一圓六十七錢●ホーキ一圓七十七錢

◎旱魃につき諸物價 水 賣口よく日一日と昇り、野菜物 非常の高價に達し、玉子 旱りにて生み方の減より一割高、小麥粉 水車の運轉中止より上人氣、挽割麥 水涸にて製造不足目切割高、米 旱魃の氣構より目下五合高、藍 旱りにて虫害を氣構へ底堅て、麻 旱りにて作柄を氣構へ目切入氣よく、鹽節 は照込の爲に鹽漁なく之が爲に高氣配なりさ

雜録

大なる葉

植物の中葉の最も大なるは椶櫚類にして、南亞米利加亞馬孫河邊に生ふるケヲジヤ、パームといへる木の葉は長さ五丈幅一丈六尺に達す。印度の錫蘭島にある或る木の葉は長さも幅も一丈八尺餘にて、土人はこれにて天幕に作るさなり。椰子の葉は長さ概ね三丈。椶櫚類の外に大葉を有するものは、錫蘭のパラソール、マグノリヤの葉長さ三丈五尺、十五八二十人を蔽ふに足る。又水草にてヴィクトリヤ、レジヤの葉は直徑七尺餘さ、或る雜誌に見ゆ。

學修

無一生

一個の島なる少女の身を以て熱心に學修を勉め十九世紀に當り第一流の數學家と肩を比ぶるに至れる少女ありけり其名をソフヰ、ゼルメンと云ふ當時佛國は革命の騒動にて國内麻の如く亂れ人心恟々として蒼生其堵に安んぜざる最中に而かも少女の一家族は大方ならず革命の擧に干繋はれる最中に在りて于時芳紀二七の少女ソフヰは獨り倩々世の景况を見るに付けて深く將來の事の案じられ後の悔を招かざらんがため確乎したる高尚なる一の職業を會得せばやと思ひ起しけるが不意なきも數學の歷史と題する一部の著書は少女の手裡に落ちけるがソフヰは徃古シ、ル島の港市シラキユーズの攻取も敵兵の振上げたる鋭き刀も自個の攻究を轉ぜしむると能はさりしアルシメードの最後の歷史（アルシメードは古代の數學の大家なりしが學問の攻究に熱心の餘吾が住めるシラキユーズの市が羅馬人に襲はれて攻取られたるをも覺らさりし）を讀むと同時に少女ソフヰの撰擇は定まれり致を受くるの師もなく又父親の文庫に在りしブズーの數學初歩の外他に學問の東道者となるべきものもなかりしがソフヰは直に學修に取掛れりソフヰは最初の内は兩親兄弟が少女の年齡の上よりするも又女子と云ふ點よりするもソフヰの身に相應しからぬ樣に思はるゝ少女の嗜好に反對せしがソフヰは有らゆる是等の障礙に打勝てりソフヰは毎度墨入の墨汁が凍る程の寒夜に起出でけるがソフヰをして否應なしに休息せしめんとて家族の輩がソフヰの部屋より火氣や衣類や内至は蠟燭を取上げゝるにぞソフヰは微かなる燈光の下に餘念なく學びの道を辿りける程なるに果ては家族の輩も少女の熱心にや感じけんソフヰの好愛を妨げさるとなりしが漸次に數學上の天才發達し他日有名なる斯道の大家となり學士會院より數多

の褒賞を獲るに至れり

庭家の趣味

霞村

人の品位は其人の有する趣味如何に由りて上下し、國民の品位は其國民の有する趣味如何に由りて高低すると多し、夫れ既に一個人にして此の如く、一國民にして此の如し、家庭豈に獨り然らさる勿きを得んや。

名璧は之を蘊むに繿縷を以てするも光輝表に徹するに非すや、磚瓦は之を包むに錦襴を以てするも些の光明も發ち得さるに非ずや、燦爛たる盛裝も以て趣味の鄙しきを掩ふに足らす、素白なる温袍も以て品位の倘きを損するに足らさらん。人に倘ふ所の者は內部に在り、精神に在りて、外形にはあらじ。

今こゝに趣味といふ、風流韻事を解するの謂に非らず、否風流韻事を解するも固より趣味の一なり、然れども趣味には更に廣き意義の含まれてあるあり。嗜好、切言すれは嗜好より生する快感、則ち是なりとす。

人誰か嗜好する所なからん、既に嗜好する所あらは、上は黃耆の老人より下は齠齒の幼兒に到る迄、何人の胸中にも趣味の甘泉湧かさらん、唯其の異とする所は、度に差ある而已、種に別ある而已。去れは趣味を以て單に茶の湯、挿花、俳諧、謡曲等に限れるが如く、思ふは大なる僻事なり。

而して家庭は人を作り、人は國民を作るものなれは、品位ある國民を作るには、家庭に品位なかるべからす。家庭に品位あらしむるには、家庭の趣味を高倘にせさるべからず。

人の嗜好に高卑あり、從つて其趣味に高卑あり。其趣味に高卑あり、是に於て人の品位に差を生じ、國民の品位に差を生じ、家庭の品位に差を生ず。然らは其高

尙にすべきものは嗜好にあらずや。

去れども高尙なる趣味を以て、貴族的嗜好と誤想すること勿れ、貴族的嗜好は外觀高尙なるか如くして、其實相往々卑醜なるとあり。

家庭の趣味は清健ならざる可からす。人の趣味清健ならさるか故に人腐敗し、家庭の趣味清健ならさるか故に家庭に風波起り、國民の趣味清健ならさる故に國民の元氣消磨す。故に清健なる趣味は人に在りては好良の榮養物たり。家庭に在りては天來の福音たり。而して國民に在りては元氣の皷吹者たり。

暑熱金を爍す三伏の候、翠綠滴る邊、榻を置て一家團欒し、一莖の野花を無雜作に挿み、餘念なく談笑するの時、寒威骨を刻む九冬の夕、爐火盛に炎を上くるの處、澁茶一啜、楣間の書畵を觀、高尙悲壯の音樂に耳を傾くるの時、誰か亦清健高尙の快感を抱かざるべき。知らずや高尙なる趣味は却て常に無雜作の中より湧き、清健なる趣味は却て常に無心の谿谷より出つる者なるを。

這般の消息を知れる家庭には自ら品位あり。這般の家庭より生れたる人には自ら品位あり。這般の人か作せる國民には自ら品位あり。

伊藤東涯

（口繪の繪解き）

伊藤東涯としいへば、古來名高き學者として人の之を知らざるもの莫し。

一日彼は途にて一小嚢の遺ちたるを見、藥ならんと思ひて、從者に之を拾はしめしに、中に十兩餘りの金あり。

彼驚きて遺し主の來るを待ち、待ち、待ち、待ちて、路上に立つゝ日暮れぬ。

斯くて彼は歸て棚の上に上げ置き、以て其遺し主を求めしが、遂に出でざるより、後伊勢の人を頼みて大神宮に奉納しける。

時事一斑

勇士は其元を喪ふを忘れず

黒死病因發見の報香港の北里氏より至るや、吾人は豫め此の科學界の戰勝者が凱旋するを待ちたりき。然るに今や彼と同功一躰なる青山醫學博士胤通石神大軍醫亭二氏が黒死病に罹りたるの悲しき報に接せり。勇士は其元を喪ふを忘れず。氏等が挺身萬死の境に入て其天職に殉して辭せざらんと欲せしもの、志氣何ぞ古豪傑に耻んや。吾人は國民の爲に深く此の科學界の勇者を惜む。嗚呼神よ、願はくは國民をして彼等が健康なる凱旋の雄姿を見せしめよ。

青山醫學博士夫人

青山醫學博士夫人につき、國民新聞は斯く報せり。

青山博士危篤の報到達するや、當局者は直ちに博士の夫人に報ぜんと欲して氣の毒さに堪へず、少時躊躇し居りぬ。森博士林太郎氏青山博士と親密の交友にて、略々夫人が凜然たる氣象ありて女々しく啼泣する者にあらざるを知れるを以て、直に行きて之を報ぜり。果然夫人は少しも動せず『良人が職分の爲めに此患に罹りたるは當然に候。良人出立の際も申し置き候。唯だ氣掛りなるは良人が職務を盡したるや否やに候』と。森博士曰ふ『勿論職務は果されたれば安心あれ』。『然らば妾に於ては露ほども遺憾は候はず』と夫人は凜然答へしとなり。聞く者曰く『青山夫人は武士的敎育の粹を得たる者なり、今世文弱の敎育を受けたる婦人は遠く及ばざるべし』。

高木友枝氏

●●●高木友枝氏あり、鹿島病院長を辭して北里氏の研究所に入り、隱然其副長として北里氏をして我去るも亦憂なしといはしめたるもの。

氏は北里氏等が黒死病因を究め得て成るに垂んとし、而して忽ちに青山氏石神氏の病に臥に至りたるより、之を助け成さんが爲めに、今や去て香港毒氣萬丈の地に向はんとすと云ふ。

壯なる哉、高木國手！

高等教育

高等學校令出でゝ、高等中學校は專門學校となり、是迄大學に進むべき階梯なりし高等普通教育は僅に其豫科として存せらるゝのみ。即ち第二位大學の大に置かるべき地を爲したるもの。

之か結果として得べく希望するは、學問の地方分權、高等教育の弘普、學問の實地活用なり。亦好改革と謂ふべし。

日本學生の氣風

第三高等中學校雇教師英人シャープ氏が我が文部大臣に呈したる意見書に、日本學生の通弊を數へて、

一、往々適當なる初學の知識を欠くにも拘らず、高等なる學科を修めんと欲する念極めて多し。從て正確適實なる教授に慊焉たるの觀あり。

二、往々一の書籍又は一の事項を再讀再調するを好まず、其了解不充分なるに拘らず、却て通曉したりと思惟するの弊あるを免れず。

三　前項の結果として、時としては教授の方法或は教授を受くべき事項に關し、教師に指揮を與ふる如き觀あり。

四　政治問題に喙を入れ、斷定を下し、及び他人をして其說に從はしめんとするが如き傾向あり。

五　小學校及中學校生徒は、早く已に法律文學醫學

理學の如き高等專門の學術を撰擇すと雖、彼等は國の富庶繁榮は商業及製造事業の發達如何に在るものたるを記憶し、其職業に從事するの準備をなすを以て滿足せざる如し。

六　課程中科目多きに過ぐるのことなきや。之が爲め腦力を混雜せしむるの傾向なきや。又腦力使用の時間多きに過ぎ、睡眠運動の時間不足することなきや。

といひき。能く其急進の弊を指摘して當れる所なきにあらず。

要するに日本人は進歩的人種なり。其弊も此處に在るべく其長技も此處に在るべし。教育の要之が利用如何を顧るのみ。

實業學校の成果

現今に於ける實業學校の成業者が如何に成り行しかにつき、一雜誌の統計したるを見るに、明治廿二年より廿六年に至る間の公立農學校卒業者は、

職業	人數	卒業生百に付
農業等	四〇六	四六、一
開墾	一二	一、四
獸醫開業	一七五	一九、九
農事巡廻教師等	二三	二、七
官廳奉職	五七	六、五
會社員	一五	一、八
學校教員	九〇	一〇、二
鑛業	一六	一、八
高等學校に入れるもの	七	九
私立學校へ遊學又は他府縣へ遊學のもの	二五	二、八
兵役に從事するもの	一二	一、四
陸軍豫備獸醫	二	二
未詳	二三	二、七
死亡	二〇	二、三

同じく商業學校卒業者は、

職業	人數	卒業生百に付
商業等	三一〇	四一、三
會社商店に入りしもの	一九三	六、五
官廳奉職	三〇	四、四

學校教員	八	一、二
外國行	二	三
官立諸學校入學のもの	一二	一、八
私立學校入學及他府縣遊學のもの	一六	二、四
兵役に服するもの	一七	二、五
未詳	一六	一一、二
死亡	一四	二、一

同しく工業學校卒業者は、

職業	人數	卒業生百に付
工業	一二一	五四、〇
商業	二二	九、八
其他の業務	二八	一二、五
官立學校入學	三	一、三
學校教員	四	一、八
兵役に就くもの	一	四
死亡	七	三、一
未詳	三八	一七、四

亦以て我邦に於ける實業學校の成果如何を察すべし。

國民新聞が東都小新聞の六月中に於ける記事を統計したるを見るに、

劇場通信	一二四、	遊廓通信	一〇九、
花柳叢話	五一、	盜賊探偵	五一、
横死自殺	四〇、	馬鹿雜報	三九、
淫行猥褻	三六、	喧嘩打傷	二七、

是れ唯都下數個の新聞紙が記したる所のみ、此等新聞記者か耳にしたる所のみ。以て社會事情の一斑を察すべく、又此等を嗜讀する思想界の情狀を知るべし。

日本人の壽命

日本人の平均命數、之を明治廿三年より廿五年に至る三年間の死亡者年齡に據て算すれば、三十六年三八にして、男は三十五年三五、女は三十七年四〇の割合なりと云ふ。

外國人の平均命數は、瑞典人四十年六六、丁抹人四十年四九、佛蘭西人四十年二六、白耳義人三十八年三五、英吉利人三十六年九二、和蘭人三十四年七二、普魯西

八三十一年一〇。

北 海 の 悲 信

墨堤三月湧くが如き喝采に送られて北海に向ひたる千島大尉郡司氏の一行は、國會の決議に由て贈られたる一萬五千金の未た其手に達せざるに、九人の壯漢絕海の孤島に窮死したり。大尉以下七人は、占守島より磐城艦に送られて擇捉島に上陸し、沙那に行けりと云ふ。

河 豚 毒 發 見

河豚毒發見、内務衛生試驗所技師田原良純氏に由て成さる。其發見に據れば、河豚の毒素は結晶物と樹脂樣物との二種ありて、甲は中性物に屬し、乙は酸の性質を有す。共に劇毒なりと。氏は甲をテトロドニンと命名し、乙を河豚酸と命名したり。

美 衣 翩 々

東都の一二女學校は、近頃漸く服裝の美を添へたりと噂するものあり。心せよ、心せよ、再び幾日の失敗をば繰返さゝれ。

驟 雨 一 過

高麗半島に於ける日清の衝突事急なりと噂し、到る所語るとして此事ならざるは莫し。

虫の音もよほすばかり夕立の
名殘すゞしき庭のくさむら。

國民は寧ろ驟雨の一過して東方世界の煩熱を洗ひ去れかしと望むものゝ如し。

士 氣

生平幾多の犯罪を見たりし多數の兵卒が、韓警に接してよりは、翕然として士氣奮ひ、現に第一師團の如き一人の犯罪者を生ぜざるに至りたりと。

韓 人 刺 客 の 獄

李逸植か洪鍾宇を教唆して金玉均を殺さしめたるは、

我が帝國領土外なりしとの故を以て、又其朴泳孝に對する者は豫備の所爲なりしといふを以て、共に罪にならずとし、李逸植及ひ川久保常吉は無罪。李逸植を制縛監禁したりとて告訴せられたる朴泳孝、朴平吉、徐亮淳、柳承萬は證據充分ならずして無罪。李圭完は重禁錮一月十日罰金二圓、鄭蘭敎は重禁錮一月罰金二圓。此の如く宣告せられて韓人刺客の其地方法廷は閉ぢられぬ。

而して李逸植を死罪に川久保を重禁錮にすべく論告したりし中小路檢事は直ちに上告し、李圭完、鄭蘭敎も亦未だ罪に服せず。

佛國大統領刺さる

佛國大統領カルノオ氏は六月廿五日無政府黨員たる伊太利人サントオに刺されて死せり。カシミール、ペリユー氏代る。

佛人は刺客が伊人たるの故を以て、伊國を怒れり。



◎新發明化粧下廣告◎



定價

大瓶金拾五錢○中瓶金拾二錢○小瓶金八錢

それ牡丹は富貴の花と呼びて猛き獅子王も此花に戯れ優しき蝴蝶も此花に眠り尊き唐土の帝王も此花を愛し玉ふとかやされはこそ牡丹を花の王と申なれ弊店白牡丹白粉の儀舊來より江湖諸彦の一方ならぬ御贔負にて益々盛大を極め難有存候偖今回發賣の牡丹水はさる名高き藥劑師と種々協議を凝して發明したる白粉下にて一度これを用ゆれば其名の牡丹花の如く顔の色艶美麗となるは申までもなく高價の藥劑をも加へあれば第一皮膚病一切にきひそはかす鉛毒を消しふきて物等効能あること疑ひあるべからず當今諸々に賣出す他の化粧下に秀で優るは佳香馥郁として一度手先につくるも二三日は匂ひ失せぬ處誠に稀代の化粧下にして貴女方のかくべからぬ品なる事を知ろしめし幾久敷御愛顧あれかし

登錄商標

東京市京橋區尾張町壹丁目

白牡丹本舖　松田謹製

◎貴婦人頭髮用美術裝飾品廣告◎

◎鼈甲製 儀式用 丸髷用 櫛笄簪各種

◎珊瑚珠根懸簪玉各種

◎帝國美術蒔繪櫛笄各種

◎金銀製寳石入 彫刻 指輪根懸 簪 各種

◎優美高尚 擢朱彫櫛笄簪玉各種

◎流行 瑪瑙珠根懸簪玉各種

◎夏期適當 芳香無比 白檀製 白壽翁筆 蒔繪櫛笄 各種

◎新案流行 夏期適當 蝶貝製櫛笄 簪 根懸 各種

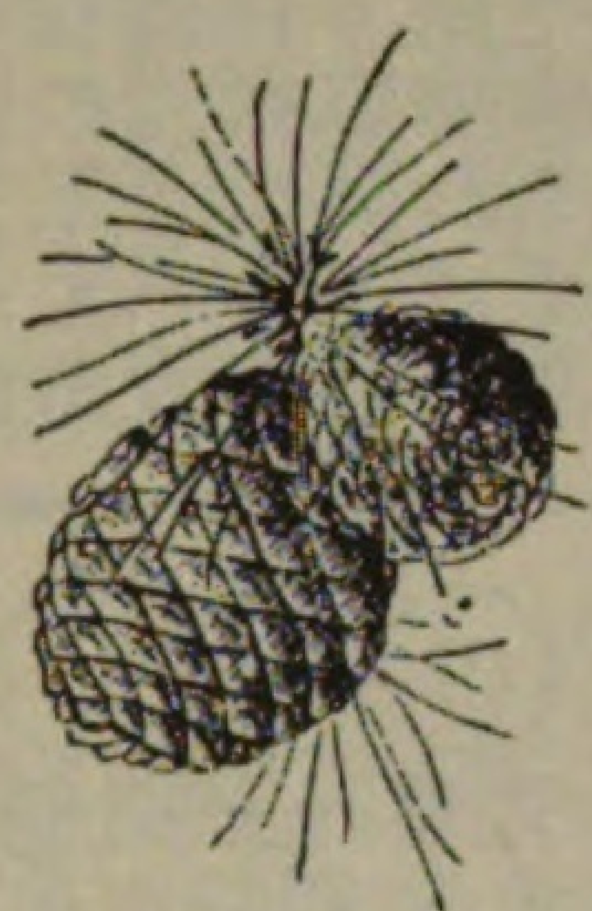
◎彫刻 蒔繪 本象牙製櫛笄簪各種

右記載の外御櫛簪笄根懸等時々流行に魁け新意匠の物品續々出來廉價を旨として販賣仕候間相不變御用向被仰付度伏て奉願上候

東京市京橋區尾張町壹丁目

白牡丹本舖松田謹白

明治廿五年九月十四日遞信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行